

ギリシア古代都市メッセネのメッセネ神殿の
復元に関する研究

熊本大学大学院自然科学研究科

安井伸顕

2011年3月

目次

第1章 序論

- 1. 研究の背景と目的 . . . 1
- 2. 既往研究と本研究の関係 . . . 1
- 3. 研究の方法 . . . 2
- 4. 本論文の構成 . . . 2

註記

第2章 メッセネ神殿の現状

- 1. 古代都市メッセネの概要 . . . 5
 - 1) 古代都市メッセネの歴史 . . . 5
 - 2) 古代都市メッセネの遺構 . . . 6
- 2. メッセネ神殿の概要 . . . 8
 - 1) 考古学調査におけるメッセネ神殿 . . . 8
 - 2) 遺構各部の現状 . . . 9
 - a. アゴラ
 - b. 神殿周縁部
 - c. 西側階段
 - d. 神殿内部
 - 3) 出土部材の概要 . . . 11
 - a. クレピス部材
 - b. スタイロベート部材
 - c. 床舗装材部材
 - d. トイコベート部材
 - (1) アンタ用
 - (2) 交差部用
 - (3) ナオス側面壁用
 - (4) オピストドモス仕切り壁用
 - (5) プロナオス及びオピストドモス側面壁用
 - (6) プロナオス仕切り壁用
 - e. 敷居
 - (1) ナオス入口の敷居部材
 - (2) プロナオス入口の敷居部材

- f. オルソスタット部材
 - (1) アンタ用
 - (2) 交差部用
 - (3) プロナオス及びオピストドモス側面壁用
 - (4) プロナオス仕切り壁用
 - (5) オピストドモス仕切り壁用
 - (6) ナオス側面壁用
 - (7) 特定不明の部材
- g. 壁ブロック部材
- h. 円柱ドラム
- i. 柱頭
- j. アーキトレーヴ部材
- k. フリーズ部材
- l. コーニス部材
- m. シーマ部材

注記

図版出典

第3章 神殿の復元と考察

1. 周柱の平面の復元と考察	・・・47
1) 柱間寸法の決定	・・・47
2) 隅の柱間の短縮	・・・48
3) クレピスの復元	・・・49
4) 正面柱数の決定	・・・49
5) 側面柱数の決定	・・・50
6) 西側階段の復元	・・・51
2. 内陣の復元と考察	・・・53
1) 敷居と周辺部材の復元	・・・54
2) アンタの部材の復元	・・・56
3) プロナオス及びオピストドモス側面壁の復元	・・・56
a. プロナオス側面壁の長さの決定	
b. オピストドモス側面壁の長さの決定	
4) ナオス側面壁の復元	・・・58
5) オピストドモス仕切り壁の復元	・・・61
6) 壁ブロック部材の復元	・・・63
7) 部材配置の順序	・・・64
a. トイコバート部材の配置順	
b. オルソスタット部材の配置順	
c. 壁ブロック部材の配置順	
8) プロナオス入口の復元	・・・66
9) 床の相対高さ	・・・69

10) 内陣の位置の決定	
3. 立面の復元	・・・71
1) エンタブラチャーの復元	・・・71
a. アーキトレヴの復元	
b. フリーズの復元	
c. コーニス、シーマの復元	
d. エンタブラチャー部材の収まり	
e. 柱の復元について	

注記

図版出典

第4章 他神殿との比較研究

1. 神殿の規模	・・・82
2. ドリス式オーダーのプロポーション	・・・83
1) 柱のプロポーション	・・・83
a. アバクス幅と上部直径 (AbW/d)	
b. アバクス幅と柱頭高さ (AbW/CH)	
c. 柱頭高さのアバクス高さ (AbH/CH)	
d. エキヌス高さのアバクス高さ (EH/AbH)	
e. アバクス幅と下部直径 (AbW/D)	
f. 上部直径と下部直径 (d/D)	
g. 柱の高さと下部直径 (H/D)	
h. 柱の高さにおける柱頭高さの占める比率 (H/CH)	
i. 柱のプロポーションのまとめ	
2) エンタブラチャーのプロポーション	・・・87
a. フリーズの高さとトリグリフの正面長さ (FH/TW)	
b. フリーズの高さとメトープの正面長さ (FH/MW)	
c. メトープの正面長さとのトリグリフの正面長さ (MW/TW)	
d. フリーズの高さとアーキトレヴの高さ (FH/AH)	
e. 柱の高さとエンタブラチャーの高さ (H/FH+AH+CorH)	
f. エンタブラチャーのプロポーションのまとめ	
3) メッセネ神殿の柱の高さの復元	・・・90
3. モールディング	・・・91
1) コーニスのモールディング	・・・91
2) トイコバートのモールディング	・・・91
4. 西側階段	・・・92
5. メッセネのアスクレピオス神殿との比較	・・・93
1) 規模、平面計画	・・・93
2) オーダーの比例関係	・・・94
a. 柱のプロポーション	
b. エンタブラチャーのプロポーション	

3) 装飾	・・・94
a. クレピス、スタイロベート、オルソスタットに見られる装飾	
b. トイコベートのモールディング	
c. 内陣側面のトリグリフ	
4) 建築部材	・・・95
a. 材質	
b. 部材の形状と設置	
5) まとめ	・・・96
注記	
図版出典	

第5章 結論

1. 本研究の総括	・・・99
1) 神殿の規模と周辺計画	・・・99
2) 神殿内陣部	・・・99
3) オーダーのプロポーション	・・・100
4) 同都市内のアスクレピオス神殿との比較	・・・100
2. 今後の研究課題と展望	・・・101

図版リスト

付録

参考文献

本論文に関連する既発表の論文及び研究報告

論文要旨

Abstract

謝辞

第 1 章 序論

第1章 序論

1. 研究の背景と目的

ドリス式神殿は、紀元前5世紀初期から中期に完成され、特有の堅牢さ、重厚さを持つ神殿建築を確立したといわれている。エギナのアテナ・アフアイア神殿¹⁾や、オリンピアのゼウス神殿²⁾はその典型的な例であり、最終的にアテネのパルテノン神殿³⁾において、まさに完成された姿となった。しかし、ヘレニズム期になると、ドリス式オーダーはフリーズに付きまとう建築上の煩瑣な問題は、装飾的な表現に対する好みとあいまって、より自由な設計が可能なイオニア式オーダーの流行を促し、しだいにドリス式オーダーは神殿建築に用いられなくなってしまった。⁴⁾

本論文の研究対象は、ギリシアの古代都市メッセネのメッセネ神殿である。メッセネは紀元前4世紀半ばに建てられたヘレニズム時代の都市であり、メッセネ神殿は、市民の生活の中心地である、アゴラ（広場）の中に建てられていたヘレニズム期のドリス式神殿であった。

メッセネの発掘は1830年ごろから始められ、⁵⁾1957年から1974年にかけて、アテネ大学教授のA.オルランドス氏によって組織的な発掘調査が行われた。⁶⁾その際、アスクレピオス神域の跡が出土し、現在の主たる遺跡のひとつとなっている。その後しばらく発掘活動は中断されていたが、クレタ大学教授P.テメリス氏がメッセネ考古学協会を組織し1987年から新たに発掘を開始し、これまでに劇場やスタディオン（競走場）、ローマ時代の住居などが新たに出土し、現在も大規模な発掘が行われている。⁷⁾

メッセネ神殿はギリシア隊により2003年に発掘された新しい遺構である。それゆえ、いまだ建築的観点からの報告はされておらず、十分な報告がされていなかった。筆者ら熊本大学古代ギリシア建築調査団（団長：伊藤重剛）は2005年～2007年の毎年夏、現地にて実測調査を行い、建築遺構の資料を得た。⁸⁾

本研究の目的はメッセネのメッセネ神殿に関して、実測で得られた資料に基づいて復元を行い、メッセネ神殿の建築的特徴を明らかにし、ギリシア建築史の中で歴史的な位置づけを行うことである。ドリス式の凋落期と言われるヘレニズム期においてドリス式神殿がどのように変貌を遂げたのか、現地調査による新しい資料を用い明らかにする。

2. 既往研究と本研究の関係

ドリス式神殿に関する研究は、既に数多く行われており、総括的な分析で代表的なものとしては、ウィトルウィウスが「建築十書」⁹⁾において、その設計法と比例関係について詳しく述べている。また、比較的新しい研究としては、J. J. クールトン氏によって、比例関係と設計法、施工法にいたるまで詳しく述べられていた。¹⁰⁾ドリス式神殿における発掘報告書も多数出されているが、¹¹⁾ヘレニズム期のドリス式神殿に関しては、同都市内のアスクレピオス神殿についての研究がE. スィウンパラ氏によって行われており¹²⁾、メッセネ神殿と同規模のドリス

式神殿であることから本研究を進める上で非常に有益な資料と言える。しかしながら、先述したように、ヘレニズム期におけるドリス式神殿は例が少なく、新しく発見されたメッセネ神殿はその貴重な例の一つであるといえる。

3. 研究の方法

2005年から2007年の夏季に行われた熊本大学古代ギリシア建築調査団の調査によって得られた一次資料に基づく復元を行う。神殿の実測方法としては、遺構から出土した部材に関してはコンベックス、曲尺、直尺を用いて実測し、10分の1の縮尺で図面を作成した。また、細かな加工が多かった柱頭部材については5分の1で図面を作成した。神殿の現状平面図については、メッセネ考古学協会により発掘時に作製された出土状況の平面図をもとに、各部の寸法、各部のレベルと新たに出土した基礎や岩盤を測定、破壊されて遺構の上に散らばる部材を取り除き、ギリシア隊の図面をトレースし修正を加えることで現状平面図を作成した。

神殿の復元にあたっては、可能な限り現地の実測調査で得られた資料によって復元することを第一とし、不明な点に関しては他の神殿の復元的研究の成果を参考することとした。

4. 本論文の構成

本稿では、最初に、実測で得られた遺構と出土部材に関して詳しく報告を行い（第2章）、これらの資料をもとに神殿の復元を行う（第3章）。さらに、第4章にて、他のドリス式神殿と比較検討し、メッセネ神殿の建築的特徴を明らかにする（第4章）。

(第1章註)

- 1) Bankel 1993
- 2) Olympia II, pp. 4-22
- 3) Orlandos 1978
- 4) ロラン・マルタン 2000. pp.176-177
- 5) Themelis 2003, pp. 11-12
- 6) オルランドスはまとまった報告書を出版しておらず、発掘の報告は以下の雑誌に発表されている。
Orlandos, A. K.: Report of Excavation, Ergon 1959, pp.142-148; 1960, pp.110-117; 1961, pp.159-166; 1963, pp.119-125; 1964, pp.88-102; 1965, pp.90-101; 1970, pp.97-132; 1973, pp.67-81; 1974, pp.79-82
- 7) P. G. Themelis, “Α ν α σ κ α φ η Μ ε σ ε η ν η,” PAE 1986, pp. 73-82, Pl. 17-22; id., PAE 1987, pp. 73-104, Pl. 64-80; id., PAE 1988, pp. 43-79, Pl. 31-57; id., PAE 1989, pp. 63-122, Pl. 54-94; id., PAE 1990, pp.56-103, Pl. 31-74; id., PAE 1991, pp. 85-128, Pl.50-78; id., PAE 1992, pp. 60-87, Pl. 20-27; id., PAE 1993, pp. 48-72, Pl. 25-49; id., PAE 1994, pp. 69-99, Pl. 19-48; id., PAE 1995, pp. 55-86, Pl. 13-42; id., PAE 1996, pp. 139-171, Pl. 53-72; id., PAE 1997, pp. 79-113, Pl. 32-65; id., PAE 1998, pp. 89-126, Pl. 36-70; id., PAE 1999, pp. 69-111, Pl. 46-74; id., PAE 2000, pp. 75-105, Pl. 41-68; id., “Α ν α σ κ α φ η Μ ε σ ε η ν η,” Ergon 1986, pp. 100-105, Pl. 76-80; id., Ergon 1987, pp. 98-104, Pl. 119-127; id., Ergon 1988, pp. 27-46; id., Ergon 1989, pp. 30-37; id., Ergon 1990, pp. 26-35; id., Ergon 1991, pp. 28-35; id., Ergon 1992, pp. 27-41; id., Ergon 1993, pp. 26-43; id., Ergon 1994, pp. 37-42; id., Ergon 1995, pp. 34-42; id., Ergon 1996, pp. 47-57; id., Ergon 1997, pp. 34-42; id., Ergon 1998, pp. 39-50; id., Ergon 1999, pp. 45-56; id., Ergon 2000, pp. 58-70; id., Ergon 2001, pp. 46-53; id., Ergon 2002, pp. 27-3; id., “Das Gymnasium von Messene in der Römischen Zeit,” Griechenland in der Kaiserzeit, Bern.
- 8) メッセネ神殿はテメリス氏によって2003年から発掘が進められた。土器等の出土遺物に関してはテメリス氏が研究を行っている。P. G. Themelis, “Α ν α σ κ α φ η Μ ε σ ε η ν η,” PAE 2003, pp. 34-38; id., PAE 2004, pp. 38-41; id., PAE 2005, pp. 48-53; id., id., PAE 2006 pp. 43-48.
熊本大学の調査隊はその建築遺構の調査を分担し、その実測調査による記録作成と研究を行った。メッセネ神殿の建築に関する研究は熊本大学の全くオリジナルの調査データに基づくものである。これまでのメッセネ神殿の研究結果は、下記の3編において発表しているので参照されたい。
安井伸顕、伊藤重剛、林田義伸：地中海古代都市の研究(119)－古代都市メッセネにおけるメッセネ神殿の復元に関する研究、日本建築学会九州支部研究報告、第45号3、2006年3月，pp.829-832；安井伸顕、伊藤重剛、林田義伸：同(120)－古代都市メッセネにおけるメッセネ神殿調査報告2006，同第46号3，2007年3月，pp.705-708；安井伸顕、伊藤重剛、林田義伸：同(121)－古代都市メッセネにおけるメッセネ神殿調査報告2007，同第47号3，2008年3月，pp.805-808を参照
また、上記以外にも、熊本大学ギリシア古代建築調査団はメッセネにおいて調査を行ってきた。
古代都市メッセネの実測調査の結果は、下記の論文等において発表しているので参照されたい。武田明純、伊藤重剛：墓廟Ⅲの遺構概要 古代都市メッセネの建築調査(1)，日本建築学会計画系論文集，第541号，2001年，pp.251-257；武田明純、伊藤重剛：墓廟Ⅲの復元 古代都市メッセネの建築調査(2)，日本建築学会計画系論文集，第549号，pp.285-291；R.Yoshitake, Y.Hayashida and J.Ito, “A Survey of the Stoa of

the Asklepieion at Messene,” *Journal of Architecture, Planning* (Transaction of AIJ), No. 576, 2004, pp. 207-214. ; 吉武隆一、林田義伸、伊藤重剛 : ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域におけるストアの研究, 日本建築学会計画系論文集, 第585号, 2004年, pp. 207-212

9) 森田 1974

10) Coulton 1977.

11) 例えば、ヘレニズム期のドリス式神殿の報告書を数例あげると、ペルガモンのアテネポリアス神殿 : R. Bohn 1885. リンドスのアテナ神殿 : Dyggve 1960. コスのアスクレピオス神殿 : Schazmann 1932 などがあげられる。

12) Sioumpara 2006.

第2章 メッセネ神殿の現状

第2章 メッセネ神殿の現状

1. 古代都市メッセネの概要

1) 古代都市メッセネの歴史

古代都市メッセネの遺跡は、ギリシアのペロポネソス半島の南西部、現在のカラマタの町から北西約20kmのところに位置する。この都市の様子は、紀元2世紀の古代ローマ時代の旅行家パウサニアスによる、「ギリシア記」の中に見ることができる¹⁾。

メッセネの町はメッセニア人が紀元前369年のレウクトラの戦いで強国スパルタを降したあと、同年にエパミノンドスの指揮のもと、約85日の間に建設されたとされている。その後、前3世紀にマケドニア、スパルタによって相次いで攻撃されたが、これを防ぎ、前146年にローマの属州となるまで独立を保った²⁾。市域は北のイトメ山、東のエヴァ山によって囲まれた山間部の傾斜地にあり、現在の発掘者のテメリス氏によると、これらの山々の尾根を結ぶ城壁は、全長9.5kmにも及ぶとしている³⁾。その後ローマ帝国の滅亡とともに都市は荒廃し、中世を経てやがて町は堆積物によって埋まってしまった。

現在のメッセネは、マヴロマティと呼ばれる小さな村であり、古代都市を見下ろすことのできる高い場所にある。北側の城壁が数百mにわたり比較的良好な状況で残っているものの、滅びてしまった市内の殆どがオリーブや無花果の畑で覆われている。



図 2-1 ギリシア地図

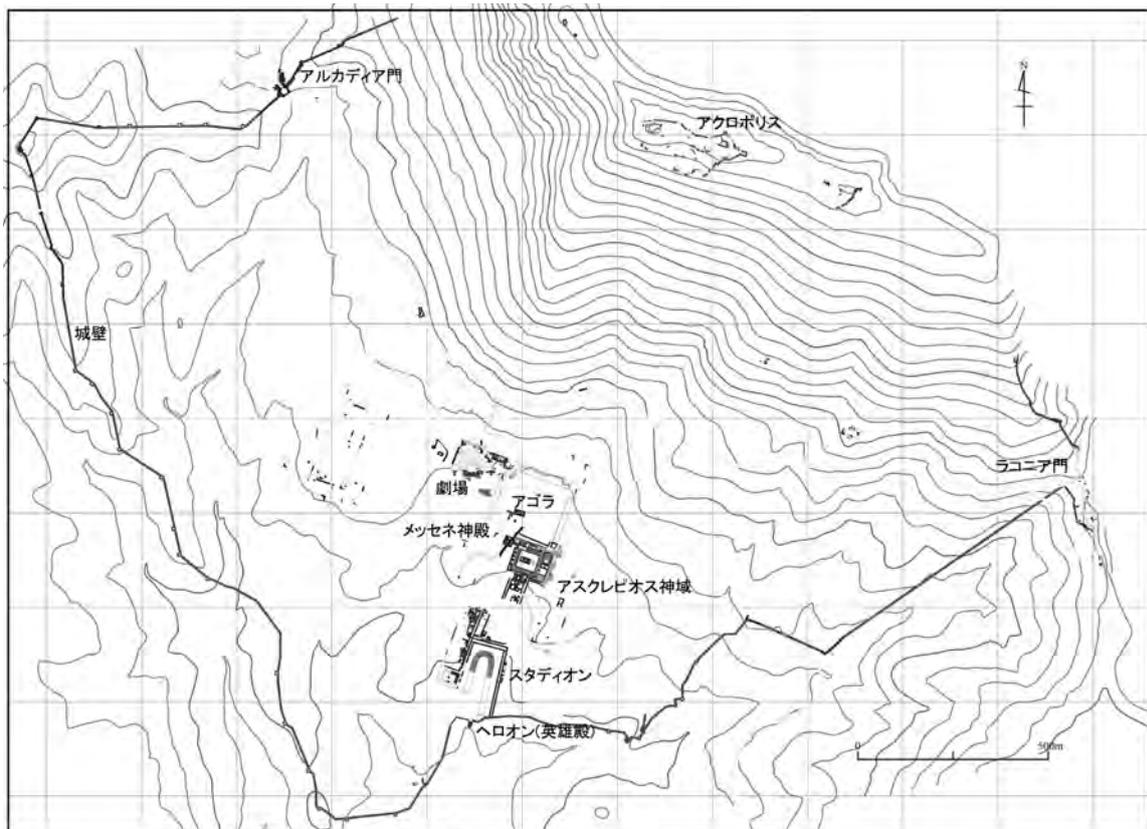


図 2-2 メッセネ都市図

2) 古代都市メッセネの遺構

古代都市メッセネは周囲を 9.5km の強固な城壁によって囲まれ、その内側には多数の建築物が建っていた。城壁には櫓が付随しており、北側には円形の平面を持つアルカディア門、東側にはラコニア門が残っている。都市の北側のイトメ山の山頂にはアクロポリスが建設されていたが、現在も残るギリシア時代の遺構は、山の中腹に見られる小さな神殿のみであり、山頂にはビザンチン時代の遺構であるボルカノ修道院が残っている。

古代都市メッセネの中心部はアゴラ地区、アスクレピオス神域、スタディオン地区の 3 つに区分することができ、都市の南北軸線は 3 つの地区をほぼ同一線上に通っている。

アスクレピオス神域⁴⁾は、街の中心に位置しており、神域中央に建つドリス式神殿を 2 列の列柱からなる矩形のストアが囲んでいる。(図 2-4) アスクレピオス神は医学の神として知られており、一般的にアスクレピオス神域はヘレニズム時代になると病院施設としての機能を持つようになったといわれている。しかし、パウサニアスによると、メッセネのアスクレピオス神域は、患者のための病院施設というよりも、むしろ多数の芸術品を展示する美術館に近いものであったといわれている⁵⁾。また、ストアの背後には、セバステイオン、エクレスシアステリオン、ブーレウテリオン、アルテミシオンと言った建物群が並び、メッセネの政治の中心地としての役割も持っていた。

アスクレピオス神域から南へ進むと、スタディオン地区がある。(図 2-5) スタディオン地区は城壁と境界を接して配置されている。スタディオンは馬蹄形の客席が南に向かって開いて



図 2-3 アルカディア門



図 2-4 アスクレピオス神域



図 2-5 スタディオン



図 2-6 劇場

おり、その正面の南端の城壁の上にはヘロオン（英雄殿）が建てられている。スタディオンの周囲には南以外の3方向にドリス式ストアが建てられており、北側にはプロピライア、西側には墓石群が見られる。また、西ストアの南端にはパラエストラが建てられていた。

アスクレピオス神域の北側には、アゴラ地区が広がっている。アゴラは、四方をストアに囲まれていた。現在はストアの一部と、北西部にアルシノエの泉が残っている。アゴラは北側の方が地形が高くなっており、現在のアゴラ内は緩やかな傾斜地となっている。メッセネ神殿はこのアゴラの南西部に出土した。アゴラの詳細は後述することとする。

さらに、アゴラの北西隅から約20m西には自然の傾斜を利用した劇場が建てられていた。(図2-6) 建設年代は定かではないが、テメリス氏によるとギリシア式の劇場が紀元前3世紀に建設され、後に紀元後2世紀にスケーネが新しく建設されたと推定している。劇場の東西全長は約100mであり、その大きさにおいてスタディオンやアスクレピオス神域とならぶ都市の中で大規模な建造物であった。現在ではオルケストラ、スケーネ、パラドスの壁、外壁の一部が残っている。オルケストラは直径約21.6m(エウリポスを含まない)の円形を呈しており、その4分の1を約長さ46.60mの舞台建物が切り取っている。舞台建物はニッチを3つ持ち、いわゆるウエスタンタイプ(3つのニッチをもつタイプ)である⁶⁾。

2. メッセネ神殿の概要

メッセネ神殿は、アスクレピオスの神域の北西、アゴラの中心からやや南西部に建てられていた。遺構の広さは約 15 × 30 m であり、西側には 5 段の階段が現存している。神殿の基礎に関しては、床材を支えたと考えられるポロス材（poros: 柔らかく粗い茶褐色の石灰岩）による基礎部材が西側に 6 列、東側に 3 列残り、また削られた岩盤がわずか出土しているのみでほとんど痕跡は見られなかった。

出土した神殿の部材は現在 1 か箇所を集められており、筆者らはそれらの部材の実測を行った。出土した円柱の柱頭部材から、ドリス式神殿であることがわかっている。現在もアゴラの発掘は続いており、神殿の周辺には、ストアや宝物庫なども出土しているが、神殿の新たな部材の発見にはいたっていない。神殿の建設時期は、出土遺物から、紀元前 4 世紀の終わりころだと考えられている。⁷⁾2007 年の実測調査までで、神殿の主要な部材の実測を完了し、86 個の部材の実測を行い、そのうち 73 個の部材に関して、図面を作成した。

以下遺構の各部について詳述する。

1) 考古学調査におけるメッセネ神殿

当時のメッセネ神殿に関する記述が見られる文献はパウサニアスの旅行記の他には見つけることが出来なかった。パウサニアスはメッセネ神殿について、「トリオパスの子メッセネの神殿であり、神像には黄金とパロス産の大理石が使われていた。神殿の背面には、歴代のメッセニアの王たちが描かれていた。」と述べている⁸⁾。トリオパスはアルゴスの王族である。その娘であるメッセネはこの地方の初代の王となる、ポリュカオンの妻となった。この地方の名は、ポリュカオンがこの地を治めることとなった際、その妻の名をとってメッセネとしたと言われている⁹⁾。しかしながら、パウサニアスの記述を参照すると、この神殿がメッセネ神殿であると考えするには不自然な点が見受けられた。なぜならば、パウサニアスは、アゴラの記述の項において、この神殿のこと述べたのではなく、アスクレピオス神域の後に記述しているからである¹⁰⁾。また、パウサニアスの記述にあるような神像や絵の痕跡等、この神殿をメッセネ神殿と結び付ける根拠がなかったため、発掘初期には、この神殿は、アゴラの記述において、パウサニアスが述べているゼウスの神殿であると考えられていた。

しかし、近年の発掘調査により得られた遺物からこの神殿がメッセネ神殿であることが裏付けられた。発掘者であるテメリス氏は、神殿の位置からパウサニアスの記述の内容と類似する黄金と大理石で作られた彫刻の破片¹¹⁾が見つかったこと、神殿の周囲で見つかった碑文の内容の 2 点から、この神殿がメッセネ神殿であることが明白となったと述べている。つまり、パウサニアスはアゴラの記述を一通り終え、アスクレピオス神域の記述を行った後に、改めてアゴラに戻り、メッセネ神殿の記述を行ったということであった。¹²⁾さらに、テメリス氏は、これまでの遺物の分析からメッセネ神殿を含む、アゴラの公共建築の建設はアスクレピオス神域の建設プロジェクトのように都市をあげた一大公共事業であったと述べている。¹³⁾

2) 遺構各部の現状

a. アゴラ

アゴラは現在も発掘中であり、どのような建物が建てられていたのか、いまだその全容を知ることにはできていない。パウサニ阿斯によるとアゴラには、安泰加護のゼウス神像、アルシノエの泉、ポセイドンの神域、アプロディテの神域などが設けられていたと述べている¹⁴⁾。このうち、2010年現在の時点で確認できるものはアルシノエの泉のみであった。(PLATE15-2) 現状では、アゴラを囲むストアの一部が出土しており、その痕跡から、約175.4×141.1mのアゴラの四方を奥行き約13～19mのストアが囲んでいたことが分かっている。北側のストアは2列の列柱からなる翼付きストアとなっていた。また、アゴラは北側が南側に比べて約13m高くなっており、現在は傾斜面となっている。(図2-7) このことから西側、東側のストアは2棟もしくは3棟に分かれて作られ、アゴラはその高さに合わせて、段差が作られていたと考えられる。地形、建てられていた建物群から考えると、アゴラは複雑な平面をしていたことが分かる。

メッセネ神殿は、アゴラの南西部、東ストアから約94.8m、北ストアから約98mの位置に出土している。神殿はストアに対して平行ではなく、北ストアに対して、反時計回りに4.5度傾いて配置されていた。¹⁵⁾ 神殿は北ストアよりも9m低い位置に建っていた。

メッセネ神殿の周囲にもいくつかの建物の痕跡が発見されている。神殿の西側階段から約3.2mのところには数本の柱と建物の痕跡が残っている。この建物は現在発掘中であるため、用途、年代などは不明であるが、出土した部材からドリス式のオーダーを持つ建物であったことが分かっている。(PLATE14-1, 2) また、神殿から南に16.3mのところには宝物庫が出土している。宝物庫は約3.7×3.4mの四方形の平面を持ち、約2mほどの穴が掘られている。長方形の石材によって作られ、それぞれの部材はクランプとダボによって接合されていた。建設年代は不明であるが、紀元

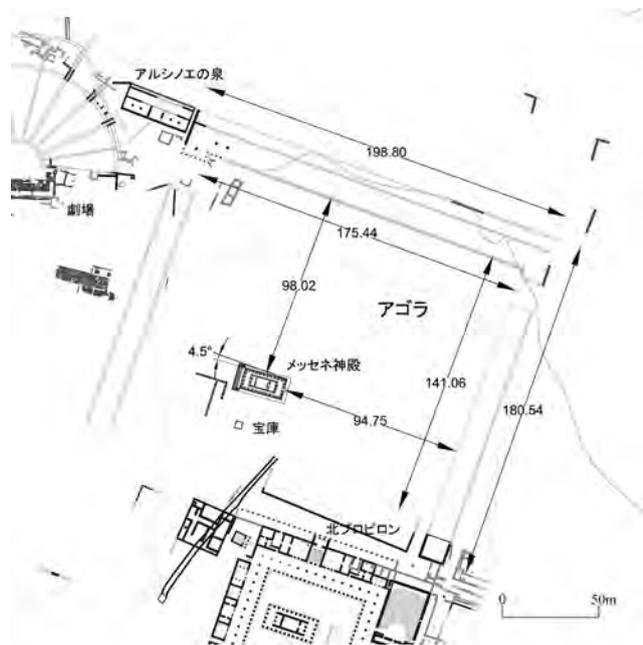


図2-7 アゴラ詳細平面図

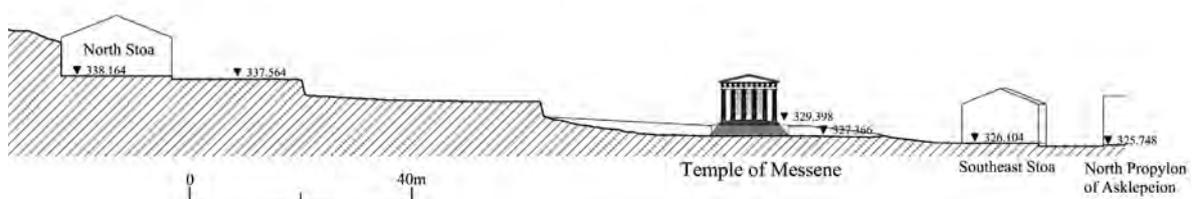


図2-8 アゴラ断面図

前 183 年にここが監獄として使われたという記述が残っていることから、それ以前に建設されていたことが分かる。(PLATE15-1)

b. 神殿周縁部

神殿があった位置の地盤は、東から西に向かって緩く傾斜しており、所々に岩盤が露出している。したがって神殿西側では階段を作り高い人工地盤としているのに対し、神殿の東側部分では地面を掘り込んで基礎を作っている。神殿が建てられていた場所は、北側、東側、南側が地面を掘り込まれる形で残っており、西側では北西と南西の隅を含め、階段を築く形で残っている。南側と北側の切込みの距離は約 11.5 m、東側の切込みから西側階段最下部までは約 26.9 m である。北側には、幅約 1.2 m、約 10 m の長さで荒石による基礎が作られている。神殿南側にも幅 1.1 m 長さ約 6 m の荒石の基礎、さらにそれより東は岩盤を削る形で基礎としている。(図 2-9, 2-11)

神殿の東側は、基礎を作るために地面を掘り込んであり、それは約 50cm の深さである。



図 2-9 東側掘り込み



図 2-10 碑文石板台座

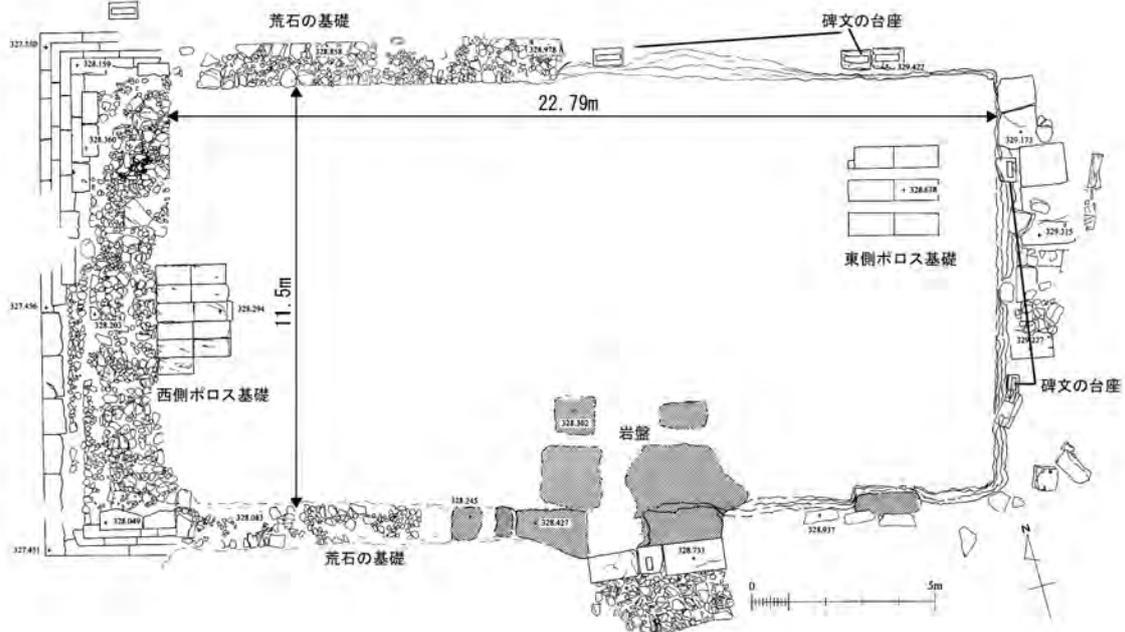


図 2-11 神殿発掘後平面図

この削り面の東側に沿って、短形の薄い敷石のような石灰岩のスラブが9枚並べられている。東側中央付近には、神殿に上がるための斜路のスラブを支えていた傾斜したポロスの基礎（幅1.6 m 長さ1.6 m）が確認される。また碑文用の石板を立てた台座が、左右対称でほぼ同じ高さの位置に2個出土している。こうした台座は他にも、周囲に数個出土している。（図2-10）

c. 西側階段

神殿の西側には5段の階段が残っており、最下段の長さは14.195 mである¹⁶⁾。階段は崩れている部分や、接合にズレが生じている部分があるため一概には言えないが、踏面は西側で0.280～0.310 m、南北で0.205～0.250 m、蹴上げは0.185～0.260 mであった。西側の階段にはクランプ（鏝（かすがい））もダボも一切使用されていない。また、この階段には後述のクレピス部材に見られるような、蹴上げ切り込みは見られない。西側階段の東側には裏込め石の荒石の基礎が残っている。（図2-11）

d. 神殿内部

神殿本体が建っていた場所には、現在ほとんど何も残っていない。神殿を建てるために掘り込んだ地盤の上には、円柱を支えたスタイロベートの基礎や内陣の壁の基礎があったはずだが、これらの部材はすべてとり除かれている。しかしながら、北東部、東側の地盤の切込みから1.68 m内側に入ったところに、列柱の内側のプテロン（柱廊）の敷石を支えていたと思われるポロスの基礎部材が残っている。こちらの部材は0.580 m×1.20 mの細長いポロスの基礎部材を2個長手に並べ、これを3列に配置した並びとなっており、各列の真々距離は96 cm程度であった。これは後述する神殿のスタイロベート部材の長さとはほぼ一致するため、この上に載る部材もスタイロベート部材と同じ大きさであったことが推測できる。また、西側階段のすぐ東側には、ポロスの石材（約0.5×1.0 m）11枚が2×6列で隙間を空けずに約2×3 mの範囲に敷き詰められており、これはスタイロベートの基礎となっていたと思われる。¹⁷⁾

しかしながら、これらの基礎部材のレベルは東側の切込岩盤より低いいため実際にはこの部材の上に、数段の基礎部材が敷かれたと考えられる。（図2-11, PLATE4-1）

3) 出土部材の概要

a. クレピス部材

クレピスとはスタイロベートの下に位置し、神殿の基壇を形成する部材である。クレピスは、ドリス式神殿では通常2段設けられる。クレピスと思われる部材は多数出土していたが、破損の状態がひどく、比較的保存状態の良い7個の部材に関して実測を行い、その内5個の部材について図面を作成した。

元の長さがわかる部材は、ほとんど残っていないが、約0.96mと約0.80mの2種類の部材が見つまっている。奥行きは0.397m～0.410mで、高さは0.206m～0.215mであった。

部材の正面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されている。また、正面以外の側面は接合面となっており、アナシロシスが施されている。部材の上面に残るクランプ穴の痕跡から、左

クレピス各部寸法(m)

部材番号	正面長さ	奥行	高さ	踏み面	切込み深さ	備考	図面
Δ50			0.208	0.250 0.250	0.017	隅の部材	有
Δ52	0.958	0.409	0.212	0.260			無
Δ59			0.215	0.240	0.020	隅の部材	有
Δ157	0.958	0.397	0.213	0.263			無
Δ181	0.802	0.410	0.209	0.261			有
Δ555		0.400	0.214	0.250	0.022		有
Δ556	0.804	0.400	0.206				有
平均値		0.403	0.211	0.253	0.020		

図 2-12 クレピス部材寸法表

右1個ずつのクランプと後方2個のクランプによって接合されていたことが分かる。また、上面には上部の部材であるクレピス部材または、スタイロバート部材が載せられていた痕跡が残っており、その値からクレピスの踏み面の幅が推測できた。その値は0.240m～0.260mであった。材質は石灰岩である。



図 2-13 クレピス部材

・ Δ 50

破損がひどく、全体の形状は明らかではないが、側面2面の下部に蹴上げ切り込みが施されていることから、隅に使われていた部材であることがわかる。部材の大きさは現存の最大値で0.800×0.610mであり、高さは0.208mであった。上面の痕跡から踏み面の幅を知ることができ、その値はどちらの側面側も0.250mであった。また、底面の端部から0.105mの位置に0.065m角、深さ0.035mのダボ穴が見られた。

・ Δ 52 (図面なし)

部材が大きく2つに割れているが、割れの形状から2つの部材をつなぎ、元の大きさを復元している部材である。部材の正面長さは0.958mであり、奥行は0.409mであった。高さは0.212mである。前面下部には2段の蹴上げ切り込みが見られ、正面左側端部には幅0.020mの縦目地が彫られている。上面には背面側端部に2つのクランプ穴、接合面側にそれぞれ1つずつのクランプ穴が見られた。また、上面の痕跡から踏み面の幅は0.260mであることがわかった。

・ Δ 59

破損がひどく元の形は明らかではないが、二つの側面がほぼ45°の角度をなしており、特殊な形状をしていることから隅のクレピス部材であることが推定できる。正面下部には2段の蹴上げ切り込みの一部が残っている。上面には2か所に深さ0.037mのダボ穴の痕跡が見られる。また、正面に対し45°に振られた側面側の上面端部には深さ0.016mのクランプ穴の痕跡が見られた。上面の踏み面の痕跡の幅は0.240mであった。

- Δ 157 (図面なし)

背面部分が破損しているが、正面部分は完全な形で残っている部材である。部材の正面長さは0.958mであり、奥行きは0.397m、高さは0.213mであった。部材の正面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されており、左側端部には幅0.024mの縦目地が彫られている。上面には背面側にクランプ穴の痕跡が残っている。踏み面の幅は0.263mであった。また、底面には背面側中央付近にてこあてが見られた。

- Δ 181

ほとんど完全な形で残っている部材である。正面長さは0.802mであり、奥行きは0.410m、高さは0.209mであった。正面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されており、正面右側端部には幅0.020mの縦目地が彫られている。上面には両接合面側端部と背面側端部に1つずつのクランプ穴が見られた。踏み面の幅は0.261mであった。

- Δ 555

部材の右側半分が欠損しており、正面長さは不明である。奥行きは0.400mで、高さは0.214mであった。正面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されており、正面左側端部には幅0.024mの縦目地が彫られている。上面には左側端部と背面側にクランプ穴が見られた。また、上面の踏み面の幅は0.250mであった。

- Δ 556

ほとんど完全な形で残っている部材である。正面長さは0.804mであり、奥行きは0.400m、高さは0.206mであった。正面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されており、正面右側端部には幅0.024mの縦目地が彫られている。上面には、側面側端部に1つ、背面側端部に2つのクランプ穴が見られた。また、踏み面の痕跡は風化のためわからなかった。

b. スタイロベート部材

スタイロベートとは階段状の基壇の最上段を意味し、その上に、円柱を建てたコロネードが形成される。

神殿の外側でコロネードを形成する部材と内陣の入口部分に敷かれる部材が出土している。外側の部材は、15個が出土しており実測を行った。また、その内、4個の部材に関して図面を作成した。部材は、上面中央部に柱を載せるための正方形のダボ穴を持つものと、上面にダボ穴のない柱が載らない部材の2種類が出土している。どちらの部材も、正面下部にはクレピス部材同様の2段の蹴上げ切り込みが施されており、正面長さは、0.956m～0.962mで、奥行きは0.880m～0.888m、高さは0.211m～0.240mであった。

内陣の部材は2個出土しており、図面を作成した。破損がひどいため、もとの大きさは不明であるが、側面は接合面となっており、他のスタイロベート部材のような蹴上げ切り込みは見られない。上面には一段高い段差が設けられている。材質は石灰岩であった。

スタイロベート各部寸法表(m)

部材番号	正面長さ	奥行き	高さ	切込み深さ	備考	図面
Δ43		0.885	0.221	0.021	柱が載る部材	有
Δ56	0.962		0.223		柱が載る部材	無
Δ64+Δ161+Δ383	0.960	0.880	0.218	0.020		有
Δ75			0.223			無
Δ147	0.961	0.884	0.222	0.022	柱が載る部材	有
Δ267			0.220		柱が載る部材	無
Δ353		0.884	0.221		柱が載る部材	無
Δ454			0.220		柱が載る部材	無
Δ590			0.225		柱が載る部材	無
Δ670			0.222		柱が載る部材	無
ΔX4			0.223		柱が載る部材	無
ΔX5		0.880	0.240			無
ΔX9	0.956	0.881	0.211			無
ΔX10			0.224			無
Δ96a+b		0.888		0.020	隅の部材	有
		0.880		0.025		
平均値	0.960	0.883	0.222			

内陣のスタイロベート(m)

部材番号	正面長さ	奥行き	高さ	切込み深さ	備考	図面
Δ117+Δ118			0.215			有
Δ130	0.964		0.217			有

図 2-14 スタイロベート寸法表

・ Δ 43

柱の載ったスタイロベート部材である。左右両側が欠損しているため、部材の元の正面長さは不明である。奥行きは 0.885m であり、高さは 0.221m であった。正面下部には 2 段の蹴上げ切り込みが施されている。上面には中央付近に大きさ 0.087 × 0.089m で、深さ 0.063m のダボ穴が側面のラインに対して 45° 傾けて配置されている。また、上面には円柱コラムのフルーティングの痕跡が見られた。



図 2-15 スタイロベート部材

・ Δ 56 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。正面を除く 3 側面の一部が残っており、接合面となっている。部材の正面長さは 0.962m であり、高さは 0.223m であった。部材の元の奥行きの長さは欠損のため不明であるが、現存の最大値で 0.840m であった。上面には大きさ 0.085 × 0.080m で、深さ 0.060m の柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して 45° 傾けて配置されている。

・ Δ 64+ Δ 161+ Δ 383

柱の載らないスタイロベート部材である。部材が大きく 3 つに割れていたが、復元されている。部材の正面長さは 0.960m であり、奥行きは 0.880m、高さは 0.218m であった。正面下部に 2 段の蹴上げ切り込みが施されており、正面右側端部には幅 0.025m の縦目地が彫られている。底面には右側端部にダボ穴、背面側端部にてこあてが見られた。

• Δ 75 (図面なし)

破損によりほとんどが失われている部材である。しかしながら、部材上面に円柱ドラムのフルーティングの痕跡が残っており、柱の載ったスタイロベート部材であったことが分かる。部材の側面は正面の一部と正面に対して左側側面の一部のみが残っている。破損のため元の大きさは不明であるが、現状の最大値で $0.58 \times 0.54\text{m}$ であり、高さは 0.223m であった。上面のダボ穴は破損のため見られない。底面には左側側面側に 1 つのダボ穴が見られた。

• Δ 96a+b

隅に位置するスタイロベート部材である。部材の大きさは $0.880 \times 0.888\text{m}$ で、高さは 0.222m であった。2 つの側面の下部に 2 段の蹴上げ切り込みが施されていることから、隅に配置される部材であることがわかる。上面には円柱コラムのフルーティングの痕跡と中央に大きさ $0.085 \times 0.080\text{m}$ 、深さ 0.054m の柱を載せるためのダボ穴が見られる。このダボ穴は他の部材のものとは異なり、側面のラインに対して、ダボ穴のラインが平行に配置されていた。また、底面には、接合面側端部に 2 つのダボ穴と 1 つのてこあてが見られ、蹴上げ切り込みのある側面側にそれぞれ 1 つずつの矩形のダボ穴が見られた。

• Δ 117+ Δ 118

内陣部のスタイロベート部材である。欠損が大きく全体の大きさは不明である。部材の高さは 0.392m であった。右側側面にはプロナオス部分の柵、もしくは扉を設置するために使われていたと思われる切り込みが施されており、前方部分は 45° に切り込まれている。左側側面にも切り込みの痕跡が残っているため、同様の加工がなされていたと考えられる。 45° の切り込みはアンタ用トイコベート部材にも見られるが寸法は異なるため、詳しい分析が必要となる。また、前方には高さ 0.215m 、幅 0.223m の一段低い水平面がとられており、左側にも幅 0.130m の水平面がとられている。このことから柱の載る部分の周囲には一段低い高さ 0.215m の水平面がとられていたと考えられる。部材の上面中央には柱を載せるためのダボ穴が見られ、底面には前面側端部にてこあてが見られた。

• Δ 130

内陣部のスタイロベート部材である。部材の半分が欠損している。正面長さは 0.964m であった。部材の元の奥行きは欠損のため不明である。また、元の高さも同様に不明であるが、高さ 0.217m のところに幅 0.290m の一段低い水平面が設けられている。

• Δ 147

柱の載ったスタイロベート部材である。部材の正面長さは 0.961m であり、奥行きは 0.884m 、高さは 0.222m であった。部材の前面下部には 2 段の蹴上げ切り込みが施されている。上面には、中央に大きさ $0.078 \times 0.074\text{m}$ 、深さ 0.056m の柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して 45° 傾けて配置されている。また、わずかながら円柱コラムのフルーティングの痕跡が見られた。底面には側面側端部に 2 つのクランプ穴と 1 つのてこあてが見られた。

• Δ 267 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。側面のうち 1 面のみが残っており、接合面となっている。元の部材の大きさは不明であるが、現存の大きさは $0.870 \times 0.670\text{m}$ であり、高さ

は0.220mであった。上面には0.085m角で、深さ0.052mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。

・ Δ 353 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。前面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されている。前面と前面に対して左側と背面が残っており、接合面となっている。正面長さは欠損のため不明であるが、現存の最大で0.890mであった。また、奥行きは0.884mで、高さは0.221mである。部材上面中央には大きさ0.080×0.077m、深さ0.060mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。

・ Δ 454 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。部材の側面のうち前面のみが残っており、前面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されている。現存の正面長さ、奥行きはそれぞれ約0.60m、約0.69mであり、高さは0.220mであった。上面には大きさ0.090m角で深さ0.054mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。底面には前面側端部から0.120mのところの大きさ0.080×0.050mで、深さ0.039mのダボ穴が見られた。このような底面のダボ穴は前述した隅のスタイロベート部材Δ96以外には見られず、隅のスタイロベート部材を固定するために用いられたと考えられ、Δ454は隅の部材であった可能性が高い。¹⁸⁾

・ Δ 590 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。側面のうち2面が現存しており、接合面となっている。部材の元の大きさは欠損のため不明であるが、現存の最大で、約0.70×0.70mであった。また、高さは0.225mであった。上面には0.090m角で深さ0.053mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。

・ Δ 670 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。側面のうち2面の一部が現存しており、接合面となっている。部材の元の大きさは欠損のため不明であるが、現存の最大では0.885×0.580mであった。また、高さは0.222mである。上面には大きさ0.090m角、深さ0.059mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。

・ Δ X4 (図面なし)

柱の載ったスタイロベート部材である。側面のうち、1面の一部が残っており、接合面となっている。部材の元の大きさは欠損のため不明であるが、現存の最大では約0.70×約0.55mであった。また、高さは0.223mである。上面には大きさ0.090m角、深さ0.043mの柱を載せるためのダボ穴が側面のラインに対して45°傾けて配置されている。

・ Δ X5 (図面なし)

柱の載らないスタイロベート部材である。側面のうち、前面と背面が残っており、前面下部には2段の蹴上げ切り込みが施されている。また、背面は接合面となっている。正面長さは、現存の長さで0.700mであり、奥行きは0.880m、高さは0.240mであった。

- Δ X9 (図面なし)

柱の載るスタイロベート部材である。ほぼ完全な形で残っており、正面側には2段の蹴上げ切り込みが見られる。正面幅は0.956m、奥行きは0.881mであり、高さは0.211mであり、やや他の部材よりも小さい。上面には、柱を載せるためのダボ穴が正面から0.440m、左側側面から0.470mの位置を中心として正面のラインから45度傾けて施されている。ダボ穴の大きさは0.085m角、深さ0.058mであった。神殿より少し離れた位置から出土したが、形状から神殿の部材と判断し、実測を行った。

- Δ X10 (図面なし)

柱の載るスタイロベート部材である。側面は接合面となる1面の一部のみが残っている。破損のため元の大きさは不明であるが、現状の最大で0.700×0.600mであり、高さは0.224mであった。上面には柱を載せるためのダボ穴が側面から0.467mの位置を中心として施されている。大きさは0.100m角であり、正面のラインと平行に配置されている。底面にはダボ穴、てこあては見られなかった。

c. 床舗装部材

神殿の床となる部材である。スタイロベートと同じ高さに配置される外側の部材と、内陣部に敷かれる部材があると思われるが、完全な形で残っているものは見受けられず、また出土した数も少ないため、外側の部材しか見つかっていない。部材の大きさや形状から加工しやすいため、他の建物などに転用されたのではないかと考えられる。部材の材質は石灰岩であった。比較的状态の良かった2個の部材に関して実測を行い、図面を作成した。部材の基本となる大きさはスタイロベート部材と同じで、長さが約0.96m、高さが約0.22mであったが、奥行きが長い部材やL字型に加工された痕跡が残る部材が見つかった。

- Δ 55

側面のうち3面が残っており、接合面となっている。欠損なく残っている辺の長さは0.962mであり、欠損している辺の長さは1.037mとなっており、スタイロベート部材よりも少し長くなっている。高さは0.217mであった。底面には長手側の端部に1つのダボ穴が見られた。

- Δ X2

高さは0.225mであり、大きさは0.960×0.960mであるが、4辺のうち1辺には隅から0.257mのところ



図 2-16 床舗装部材

部材番号	正面長さ	奥行き	高さ	備考	図面
Δ55	0.962		0.217		有
ΔX2	0.96	0.96	0.225	L字型	有

図 2-17 床舗装部材寸法表

より、突出しており、元の形はL字型の特殊な形状をしていたことがわかる。しかしながら突出部は欠損のため全形は不明であった。底面には端部に1つのダボ穴が見られた。

d. トイコベート部材

トイコベートとは腰壁を形成するオルソスタットの直下に位置し、壁の基壇となる部分である。メッセネ神殿においては石灰岩で作られていた。トイコベート部材は、ほとんどの部材が現存しており、28個の部材に関して実測を行い、図面を作成した。

共通の加工として部材の側面下部には接合面が施され、上部にはモールディングと段差付き仕上げ面が施されている。これらの加工から床材と同じ高さに配置されることがわかる。また、他のトイコベート部材と連結する側の上面端部には2つのクランプ穴が見られた。部材の形状から、以下の6種類に分類することができた。

(1) アンタ用

アンタとは側壁の端部を意味する。アンタは、端部が角柱となることから、その形状と側面3方向に施されたモールディングにより、容易にアンタ用部材と判断できる。この部材は4個すべてが残っており、実測と図面作成を行った。どの部材も、前面下部の接合面部分が破損しており、部材の元の大きさは不明であるが現存の最大値をとると部材の幅は0.705mであり、同じく長さは1.023mである。高さは0.392m～0.406mであった。角柱部分の側面には上部に2種類のモールディングと段差付き仕上げ面が施されている。また、壁部分の側面は外側にモールディングと段差付きの仕上げ面が施され、内側面にはモールディングはなく、段差付き仕上げ面のみが施されている。



図 2-18 アンタ用トイコベート部材

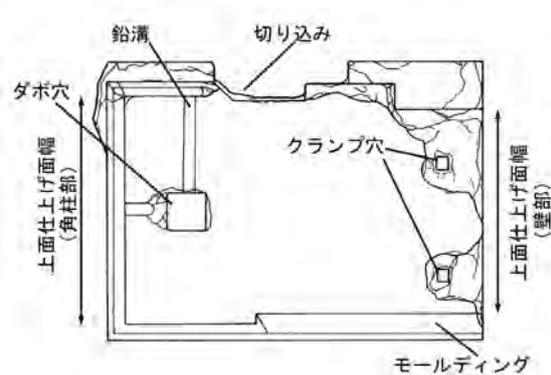


図 2-19 アンタ用トイコベート部材詳細図

アンタ用トイコベート部材寸法 (m)

部材名	上面仕上げ面幅 (壁側)	上面仕上げ面幅 (角柱側)	上面長さ	部材幅	部材長さ	部材高さ	側面装飾高さ (外)	側面装飾高さ (内)	外側装飾の出
Δ47	0.522	0.572		(0.701)	(0.986)	0.405	0.155		0.013
Δ223				(0.695)	(0.983)	0.392		0.154	
Δ349	0.514	0.571	0.899	0.705	(0.972)	0.406	0.158		0.014
Δ577+Δ580				0.669	(1.023)	0.403	0.160		
平均	0.518	0.572	0.899	0.703	0.980	0.401			0.0135

図 2-20 アンタ用トイコベート部材寸法表¹⁹⁾

- Δ 47

角柱部分の一部と内側側面下部が欠損している部材である。元の大きさは不明であるが、現存の最大は長さ 0.986m、幅は 0.701m であった。高さは 0.405m である。オルソスタット部材が載る上面仕上げ幅は、角柱部では欠損のため不明で、壁部分は 0.522m であった。内側部分には幅約 0.20m、深さ 0.10m の切り込みが施されている。この切り込みは、後方は直角に、前方は 45°に切り込まれており、その形状から、プロナオス部分の柵、もしくは扉のためのものと思われる。上面には 2 つのクランプ穴と角柱部に深さ 0.035m のダボ穴が見られ、それにつながるように鉛を流し込むための溝が施されている。

- Δ 223

欠損が激しく元の大きさは不明の部材である。部材の大きさは現存の最大で長さ 0.983m で、幅は 0.695m であった。高さは 0.392m である。上面外側部分が欠損しているため上面仕上げ幅は不明である。

部材の内側側面下部には高さ約 0.210m、幅 0.066m の段差が付けられている。上面には 2 つのクランプ穴と角柱中央部分に大きさ 0.105m 角、深さ 0.020m のダボ穴があり、それにつながるように鉛を流し込むための溝が彫られている。底面内側端部にはダボ穴が 1 つ見られた。

- Δ 349

部材の上部部分がほぼ完全な形で残っている部材である。幅は 0.705m で、高さは 0.406m であった。下部の欠損のため、部材の元の長さは不明であるが、現存の最大で 0.972m であった。上面仕上げ幅は角柱部分で 0.571m、壁部分で 0.514m である。内側側面下部には Δ 47 と同様の切り込みが施されており、切り込み以外の部分は高さ 0.221m、幅 0.054m の段差となっている。上面には 2 つのクランプ穴と角柱部分に大きさ 0.096m 角、深さ 0.040m のダボ穴があり、それにつながるように鉛を流し込むための溝が彫られている。

- Δ 577+ Δ 580

部材が大きく 2 つに割れているが、つなぎ合わせ、実測を行った。幅は 0.699m で高さは 0.403m であった。欠損のため元の部材の長さは不明であるが、現存の最大長さは 1.023m であった。破損がひどく、残っている仕上げ面も少ないが、角柱の角の部分と思われる 90°に曲がったモールディングの形跡が見られることからアンタ用のトイコベート部材であることがわかる。上面仕上げ幅は欠損のため不明である。内側側面下部には高さ 0.224m、幅 0.076m の段差が設けられている。上面には 1 つのクランプ穴、底面には内側端部に 1 つのダボ穴が見られた。

(2) 交差部用

L 字型に加工されている部材が 4 個出土しており、それぞれに実測と図面作成を行った。これらの部材は L 字の先端でない一方の面に 45°の切り込みがあり、角が 45°にカットされた別のトイコベート部材と隣接し、3 方向に交差する交差部の部材となることがわかっている。部材の大きさは平均値で 1.009 × 0.967m で高さは 0.403m であった。L 字の内側部分には床材を載せるための切り込みが施されており、その幅は 0.114 ~ 0.185m であった。一方の側

面にはモーディングと段差付仕上げ面が施されておりその下は接合面となっている。これは後述するプロナオス及びオピストモス側面壁用トイコベート部材の外側側面の加工と同じものであり、このことから、この側面が内陣の外側面になることがわかる。また別の側面には段差付き仕上げ面のみが施されている。こちらは神殿内側に伸びる一辺だと考えることができた。上面仕上げ面幅は3方向でそれぞれ違い(図2-22:上面仕上げ面幅A,B,C)、それぞれの方向に2つずつのクランプ穴が見られる。また、オルソスタットを配置するためのダボ穴とテコ穴が見られた。4個の部材が見つかり、実測と図面の作成を行った。

・ Δ 3

部材の大きさは 1.007 × 0.969m で、高さは 0.406m であった。L字の先端の上面仕上げ幅は内陣の仕切り壁側で 0.529m、外側の壁側で 0.490m であった。また、L字の内側に当たる部分には床材を載せるための切り込みが施されており、幅は 0.114m、0.175m で深さは 0.079m である。上面にはL字の先端部分にそれぞれ2つずつのクランプ穴、45°に加工された接合面側端部に1つのクランプ穴が見られた。底面にはL字の先端部分に1つずつのてこ穴が見られた。

・ Δ 9

部材の大きさは 1.005 × 0.964m で、高さは 0.400m であった。L字の先端の上面仕上げ幅は内陣の仕切り壁側は欠損のため不明、外側の壁側で 0.483m であった。また、L字の内側の切り込みの幅は 0.147m、0.148m で深さは 0.071m である。上面にはダボ穴が2つ、てこ穴が1つを1組とし、これに直角方向にもう1組が配置されている。また、L字の先端部分



図 2-21 交差部用トイコベート部材

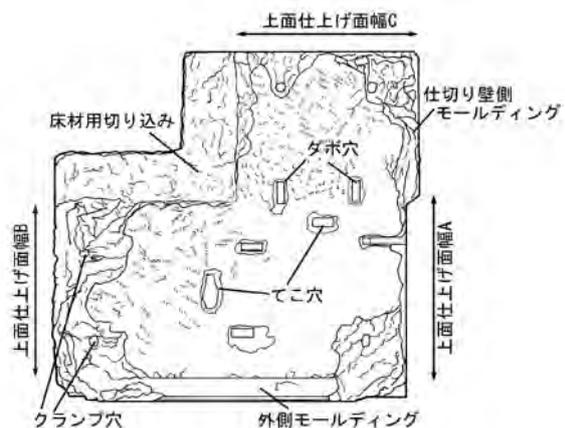


図 2-22 交差部用トイコベート部材詳細図

交差部用トイコベート部材寸法(m)

部材名	上面仕上げ面幅A	上面仕上げ面幅B	上面仕上げ面幅C	部材幅	部材長さ	部材高さ	外側装飾の出	仕切り壁側装飾の出
Δ3	0.498	0.490	0.529	0.969	1.007	0.406		
Δ9	0.503	0.483		0.964	1.005	0.400	0.012	
Δ140						0.404		
Δ145	0.506	0.486	0.515	0.967	1.014	0.403		0.013
平均	0.502	0.486	0.522	0.967	1.009	0.403	0.012	0.013

図 2-23 交差部用トイコベート部材寸法表

にそれぞれ2つずつのクランプ穴、45°に加工された接合面側にも2つのクランプ穴が見られる。底面には、L字の先端側端部それぞれにクランプ穴とてこあてが1つずつ見られた。

・ Δ 140

L字の一端が欠損している部材である。部材の大きさは現存の最大値で0.933 × 0.833m、高さは0.404mであった。L字の先端の上面仕上げ幅は不明である。L字の内側の切り込みは幅0.180mで深さは0.055mであった。上面には内陣の仕切り壁側のL字の先端に2つのクランプ穴、45°に加工された接合面側にも2つのクランプ穴が見られた。また、上面のL字の内側部分にてこ穴が1つ見られた。底面は実測できなかった。

・ Δ 145

部材の大きさは1.014 × 0.967m、高さは0.403mである。L字の先端の上面仕上げ幅は内陣の仕切り壁側は0.515m、外側の壁側で0.486mであった。L字の内側の切り込みはそれぞれ、幅0.168m、0.185mで、深さは0.067mである。上面にはダボ穴とてこ穴が1つずつのものが1組と、それに直行する形で1つのダボ穴が見られる。また、L字の先端にそれぞれ2つずつのクランプ穴と45°の加工がされている接合面側に1つのクランプ穴がみられた。底面にはL字のそれぞれの先端部分に、てこあてとダボ穴が1つずつ見られた。

(3) ナオス側面壁用

内側に床材を載せる切り込みと外側に交差部用トイコベートと同様のモールディングと段差付き仕上げ面が施されている部材があり、ナオス側面壁用に用いられたと考えられる。9個出土しており実測と図面作製を行なった。部材の長さは0.957～0.968mの間で差があるもののその平均値は0.960mであり、外周のスタイロベート部材の正面幅に等しいことがわかった²⁰⁾。切り込み部分を含んだ幅は0.660～0.713mで、床材によって隠れる切り込み部分の寸法は一定ではなかった。上面仕上げ面幅は0.476～0.488mであった。また、上面中央にダボ穴とテコ穴があるものとなないものがあった。

・ Δ 1

部材の長さは0.960mであり、幅は0.663m、高さは0.403mであった。壁が載る部分の上面仕上げ面幅は0.488mである。外側にはモールディングと段差付の仕上げがあり、その下は接合面となっている。外側の段差付き仕上げ面の縦目地の有無は欠損のため不明であった。内側には床材を載せるための切り込みがあり、幅は0.110m、深さは0.093mであった。上面には壁が伸びる接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴がみられた。底面には外側、内側と一方の壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ1つずつダボ穴が見られた。

・ Δ 8

部材の長さは0.958mであり、幅は0.713m、高さは0.402mであった。上面の欠損が激しく、上面仕上げ面幅は不明である。外側に上述同様のモールディングと段差付仕上げ面、接合面が続く。外側の段差付き仕上げ面の縦目地の有無は欠損のため不明であった。床材用の切り込みは幅0.168m、深さ0.105mであった。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部に2つずつ

つのクランプ穴、中央部分に2つのダボ穴と1つのでこ穴が見られる。底面には壁が伸びる接合面側端部の一方にダボ穴とてこ穴が1つずつ見られた。

・ Δ 15

部材の一方の端部が欠損していたが、欠損部分の一部が見つかり、復元された部材である。この復元からもとの部材の長さは0.961mであることがわかった。また、幅は0.675m、高さは0.408mであった。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.482mである。外側にはモールディングと段差つきの仕上げがあり、さらにその下は接合面となっている。また、外側の段差付き仕上げ面には他の部材の端部に見られるような縦目地は施されていない。内側の床材を載せるための切込みの幅は0.126m、深さは0.085mであった。上面には壁が伸びる方向の一方の接合面側端部にクランプ穴が2つ、もう一方には欠損により1つのクランプ穴のみが残っている。また、接合面にはてこ穴らしき仕上げが3つ見られるが、用途は不明である。底面には、てこ穴、ダボ穴等は見られなかった。

・ Δ 16

ほぼ完全な形で残っている部材である。部材の長さは0.942mで、幅0.660m、高さは0.404mであった。また、壁が載る上面の仕上げ面幅は0.484mである。内側の床材用の切込みの幅は0.111m、深さは0.075mであった。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下は接合面となっている。段差付き仕上げ面の右側の端部に縦目地が彫られている。上面には壁が伸びる方向の接合面側の端部にそれぞれクランプ穴が2つずつ、中央部分に2つのダボ穴と1つのでこ穴が見られた。底面には壁が伸びる方向の接合面端部の一方と内側端部にダボ穴と



図 2-24 ナオス用トイコペート部材

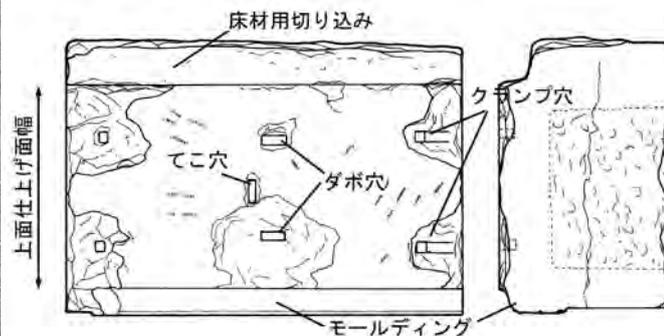


図 2-25 ナオス用トイコペート部材詳細図

ナオス側面壁用トイコペート部材寸法(m)

部材名	上面仕上げ面幅	部材幅	部材長さ	部材高さ	側面装飾高さ	外側装飾の出	上面のダボ穴
Δ1	0.488	0.663	0.960	0.403	0.160	0.012	無
Δ8		0.713	0.958	0.402	0.154	0.016	有
Δ15	0.482	0.675	0.961	0.408	0.160	0.013	無
Δ16	0.484	0.660	0.942	0.404	0.158	0.013	有
Δ18	0.484	0.655	0.957	0.405	0.155	0.015	無
Δ48	0.476	0.635	0.973	0.405	0.150	0.013	有
Δ143			0.955	0.401			有
Δ465	0.485	0.632	0.968	0.403	0.162	0.013	無
Δ575+Δ576+Δ579	0.481	0.631	0.963		0.150		無
平均	0.483	0.658	0.960	0.404	0.156	0.014	

図 2-26 ナオス用トイコペート部材寸法表

てこあてが1つずつの組がみられた。

・ Δ 18

ほぼ完全な形で残っている部材であり、部材の長さは0.957m、幅は0.655m、高さは0.405mである。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.484mであった。内側には床材用の切込みがあり、幅は0.109m、深さは0.073mであった。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下は接合面となっている。外側の段差付き仕上げ面には他の部材に見られるような縦目地は施されていない。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴が見られる。底面には、一方の壁が伸びる方向の接合面側端部と内側端部それぞれにてこあてとダボ穴が1つずつ見られた。

・ Δ 48

ほぼ完全な形で残っている部材であり、部材の長さは0.973mで、幅は0.635m、高さは0.405mである。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.476mであった。内側の床材用の切込みの幅は0.092m、深さは0.067mであった。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下には接合面が施されている。また、段差付き仕上げ面の右側の端部には縦目地がみられた。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴、中央に2つのダボ穴と1つのでこ穴が見られた。底面には壁が伸びる方向の接合面側端部の一方と内側端部それぞれに、てこあてとダボ穴が1つずつ見られた。

・ Δ 143

上面外側部分が大きく欠損している部材である。部材の長さは0.955mで、幅は0.687m、高さは0.401mであった。モールディング部分が欠損のため確認できないが、現存の上面幅や部材の長さから、ナオス側面壁用のトイコベートであることが推測できる。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部に1つずつのクランプ穴、中央に2つのダボ穴と1つのでこ穴が見られる。底面には壁が伸びる接合面側端部の一方にてこあて、ダボ穴が1つずつ、内側端部にダボ穴が1つ見られた。

・ Δ 465

上面のクランプの痕跡部分が大きく欠損している部材である。部材の長さは0.968mで、幅は0.632m、高さは0.403mであった。上面仕上げ面幅は0.485mである。内側の床材用の切込みの幅は0.077m、深さは0.070mであった。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下は接合面となっている。外側の段差付き仕上げ面の縦目地は欠損のため不明であった。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴が見られる。また、上面中央付近に2個のきれいな円形の穴があいているが、その形状から、後にドリル等であけられたものと考えられ、加工とは直接関係のないものである。底面には壁が伸びる接合面側端部にてこあてが1つ、内側端部にダボ穴が1つ見られた。

・ Δ 575+ Δ 576+ Δ 579

部材が破損により、いくつかの部材に分かれており、そのうちの3つの部材を接合し実測を行った。一方の側面にモールディングと段差付きの仕上げ面、反対側の側面には床材用の切り込みがあることから、ナオス側面壁用の部材だとわかる。部材の底面部分は破損のため残っ

ておらず、部材の元の高さは不明であるが、現存の最大で 0.333m であった。また、部材の長さは 0.963m、幅は 0.631m であった。壁が載る上面の仕上げ面幅は 0.481m であり、床材を載せる切り込みの幅は 0.103m、深さは 0.082m であった。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ 2 つずつのクランプ穴が見られた。底面は破損のため不明である。

(4) オピストドモス仕切り壁用

内側に床材を載せるための切り込み、外側には段差付きの仕上げ面が施されている部材が 3 個出土しており、実測と図面作製を行なった。交差部用部材の L 字の内、神殿内側に伸びる辺と同じ側面の加工であるためオピストドモスの仕切り壁に使われたと考えられる。部材の長さは 0.858 ~ 0.860m となっており、ナオス側面壁用の部材よりも短くなっている。上面仕上げ面幅は 0.527m と 0.512m であった。上面中央にダボ穴とてこ穴があるものもないものがあつた。

・ Δ 2

部材の上面の欠損が激しく、外側部分の詳細が不明であるが、現存の上面幅と部材の長さから、オピストドモスの仕切り壁用につくられたトイコベートと推測できる。部材の長さは 0.858m で、幅は 0.710m、高さは 0.410m であった。内側の床材用の切り込みの幅は 0.206m で、深さは 0.070m である。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ 1 つずつのクランプ穴が見られる。底面には壁が伸びる接合面側端部の一方と内側端部にそれぞれ 1 つのダボ穴が見られた。



図 2-27 オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材

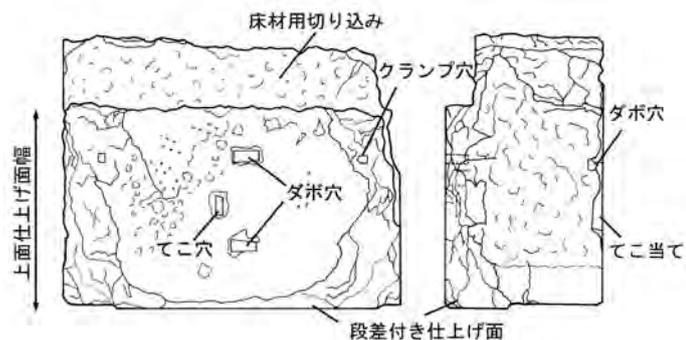


図 2-28 オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材詳細図

オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材寸法 (m)

部材名	上面仕上げ面幅	全幅	切込幅	部材長さ	部材高さ	側面裝飾高さ	外側裝飾の出	上面のダボ穴
Δ2			0.206	0.858	0.410			無
Δ14	0.527	0.690	0.160	0.858	0.404	0.158	0.011	無
Δ169	0.512	0.692	0.180	0.860	0.400	0.153		有
平均	0.520	0.691	0.182	0.859	0.405		0.011	

図 2-29 オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材寸法表

・ Δ 14

部材の長さは0.858mで、幅は0.690m、高さは0.404mであった。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.527mである。内側の床材を載せるための切り込みの幅は0.160mで、深さ0.072mである。外側は段差付仕上げ面とその下は接合面となっている。段差付き仕上げ面の端部の縦目地の有無は破損のため不明である。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴が見られる。また、両側の接合面には、てこ穴らしき仕上げが2つずつ見られるが、用途は不明である。底面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ1つずつのてこあてが見られた。

・ Δ 169

上面両端の欠損が激しい部材である。部材の長さは0.860mで、幅は0.692m、高さは0.400mであった。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.512mである。内側の床材を載せるための切り込みの幅は0.180mで、深さ0.076mであった。外側には段差付仕上げとその下は接合面が見られる。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ1つずつのクランプ穴、中央に2つのダボ穴と1つのてこ穴がみられる。底面には壁が伸びる方向の接合面側端部の一方と内側端部にそれぞれに、てこあてとダボ穴が1つずつ見られ、外側にはてこあてが1つ見られた。

(5) プロナオス及びオピストモス側面壁用

内側に段差付きの仕上げ面、外側にはモールディングと段差付きの仕上げ面が施された部材が6個出土しており実測と図面作製を行なった。これらの形状がアンタ用の部材と同じことから、この部材はプロナオスもしくはオピストモスの側面壁に使われていたと考えられる。部材の長さは0.949～0.976mで、平均値は0.959mとなり、ナオス側面壁用部材とほぼ同じ値であった。上面仕上げ面幅は0.510～0.519mであった。上面中央にダボ穴とテコ穴があるものとなないものがあった。また、Δ 131には上面に正方形のダボ穴が見られ、このダボ穴はアンタのオルソスタット部材の底面にも見られることから、Δ 131はアンタ用のトイコベート部材と隣接すると考えられる。Δ 21、Δ 220は内側隅部分が45度に斜めにカットされており、その形状から交差部用のトイコベート部材と接合することがわかる。

・ Δ 21

一方の内側の角部分がほぼ45度に斜めにカットされており、この形状から交差部用のトイコベートと接合することがわかる部材である。部材の長さは0.955mで、幅は0.585m、高さは0.405mであった。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.519m。外側にはモールディングと段差付仕上げ面、さらにその下には接合面が見られる。内側には、段差付仕上げ面とその下に接合面が施されている。段差付き仕上げ面の端部の縦目地の有無は破損のため不明である。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴、中央には2つのダボ穴と1つのてこ穴が見られる。底面には壁が伸びる接合面側端部の一方と内側端部にそれぞれ、てこあてとダボ穴が1つずつ見られた。

・ Δ 49

アンタの部材と隣接する部材である。部材の半分が欠損しているため、元の部材の長さは不明であるが、現存の最大で0.652mであった。また部材の幅は0.515m、高さは0.405mである。壁が載る上面の仕上げ面幅は欠損のため不明である。外側にはモールディングと段差付仕上げ面、さらにその下には接合面が見られる。内側には、段差付仕上げ面とその下に接合面が施されている。段差付き仕上げ面の端部の縦目地の有無は破損のため不明である。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部に2つのクランプ穴が見られ、欠損している端部側には壁が伸びる方向と平行に彫られたダボ穴に鉛を流し込むための溝が見られる。このことから、この部材はアンタの部材と隣接する部材であることがわかる。底面には内側と壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ、てこあてとダボ穴が1つずつ見られた。

・ Δ 131

アンタの部材と隣接する部材である。部材の長さは0.954mで、幅は0.577m、高さは0.408mであった。内側側面部分の欠損がひどく、上面仕上げ面の幅は不明である。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下には接合面が見られる。また、外側の段差付き仕上げ面の右側端部には縦目地、中央には一部切り込みがみられた。内側の段差付き仕上げ面は、欠損している。上面には、壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴、中央部に2つのダボ穴と1つのでこ穴がみられる。また、中心からやや内側よりのところに0.094m角のダボ穴がみられ、それにつながる形で外側に向かって鉛を流し込む溝が彫られている。このことからこの部材は、アンタの部材と隣接すると考えられる。底面には壁が伸びる方向の接合面側端部の一方と内側端部にそれぞれ、てこあてとダボ穴が1つずつ見られた。



図 2-30 プロナオス・オピストドモス側面壁用
トイコバート部材

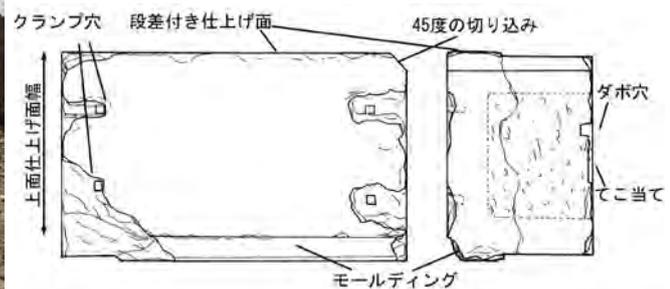


図 2-31 プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコバート部材詳細図

プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコバート部材寸法 (m)

部材名	上面仕上げ面幅	部材幅	部材長さ	部材高さ	側面装飾高さ (外)	側面装飾高さ (内)	外側装飾の出	内側装飾の出	上面ダボ穴	45度切り込み
Δ21	0.519	0.585	0.955	0.405	0.157	0.152	0.015	0.013	有	有
Δ49		0.585		0.405	0.155	0.155	0.015	0.013	無	無
Δ131			0.954	0.408	0.157		0.013	0.013	有	無
Δ220	0.510	0.579	0.949	0.401	0.156	0.150	0.013	0.013	無	有
Δ243	0.512	0.582	0.976	0.403	0.158	0.152	0.016	0.01	無	無
ΔX8			0.963	0.400	0.158		0.015		無	無
平均	0.514	0.583	0.959	0.404	0.156	0.154	0.015	0.012		

図 2-32 プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコバート部材寸法表

- Δ 220

交差部の部材と隣接する部材である。部材の長さは0.949mで、幅は0.579m、高さは0.401mであった。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.512mである。外側にはモールディングと段差付の仕上げ面、その下には接合面が見られる。また、内側には段差付仕上げ面、接合面のみが見られる。内側の段差付き仕上げ面の右側端部に縦目地が彫られている。内側の一方の角はほぼ45度に斜めにカットされておりその形状から、交差部のトイコベートと接合することがわかる。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつクランプ穴がみられた。底面には壁が伸びる方向の接合面側端部の一方と内側端部それぞれに1つのでこあてと1つのダボ穴が見られた。

- Δ 243

部材の長さは0.976mで、幅は0.582m、高さは0.403mである。壁が載る上面の仕上げ面幅は0.512mであった。外側にモールディングと段差付仕上げ面、その下に接合面がある。また、内側には段差付仕上げ面、と接合面のみが見られる。側面の段差付き仕上げ面の端部の縦目地の有無は破損のため不明である。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ2つずつのクランプ穴が見られる。底面には壁が伸びる方向の接合側端部の一方と内側端部にてこあて、ダボ穴が1つずつ見られる。

- Δ X8

部材長さは0.963mで、幅は0.571m、高さは0.400mである。欠損がひどく上面の仕上げ面幅は不明である。内側部分の段差付き仕上げ面は残っていないが、外側にはモールディングと段差付き仕上げ面の装飾の一部が残っており、反対側の側面の下部は接合面となっていることから、プロナオス、オピストドモス側面壁用の部材であることがわかる。上面には壁が伸びる方向の接合面側端部にそれぞれ1つと2つのクランプ穴が見られた。また、底面には壁が伸びる方向の接合面側端部の一方と内側端部にそれぞれ1つのダボ穴が見られる。

(6) プロナオス仕切り壁用

上面に切り込みが施されており、その形状から敷居と隣接すると考えられる部材が出土している。2個出土しており、実測と図面作成を行った。敷居と隣接し、上面には壁を載せるための仕上げがみられることから、プロナオス仕切り壁用のトイコベート部材であることがわかる。上面がL字型に加工されており、L字の一方の端部には床材を載せるための切り込み、また別の端部には敷居部材を載せるための切り込みが施されている。正面側に段差付き仕上げ面があり、その下は接合面となっている。2つの部材は対象の形をしており、対になって敷居を支える部材であった。

- Δ 11

部材の大きさは1.073 × 0.872mであり、高さは0.404mであった。壁が載る部分の上面仕上げ面幅は0.526mである。部材はL字型に加工されており、L字の内側部分には床材用の切り込みが施されている。切り込みの深さは0.066mであった。また、L字の一方の外側部分には、敷居を載せるための切り込みが施されており、その幅は0.242mで、正面側でさらに0.132m

広がる形になっている。切り込みの深さは0.180mであった。正面上部には段差付仕上げ面があり、その下は接合面となっている。上面には敷居とは反対側の端部に2つのクランプ穴が残っている。また、底面には敷居と接合する側にてこあてとダボ穴が1つずつ、背面側にダボ穴が1つ見られる。

・ Δ 17

部材の元の大きさは欠損のため不明である。現存の部材の大きさは0.885m × 0.870mであり、高さは0.404mである。壁が載る部分の上面仕上げ面の幅は0.515mであった。部材はL字型に加工されており、L字の内側部分には、床材用の切り込みが施されている。切り込みの深さは0.067mであった。また、上述同様にL字の外側部分には、敷居を載せるための切り込み部分があったと思われるが、欠損している。正面側には段差付仕上げ面があり、その下は接合面となっている。上面には敷居とは反対側の端部に2つのクランプ穴が見られる。

e. 敷居

敷居を構成する部材は大きく分けて、ナオス入口の敷居とプロナオス入口の敷居の2種類に分類することができた。ナオス入口の敷居は一つの大きな部材で構成されており、上面には扉を設置するための痕跡が複雑に施されている。プロナオス入口の敷居は部材のほとんどが欠損しているため、もとの形状を推測することは難しい。しかしながら、アンタのトイコベート部材の形状と対応させることで、プロナオス入口の敷居であることがわかった。これらの部材



図 2-33 プロナオス仕切り壁用トイコベート部材

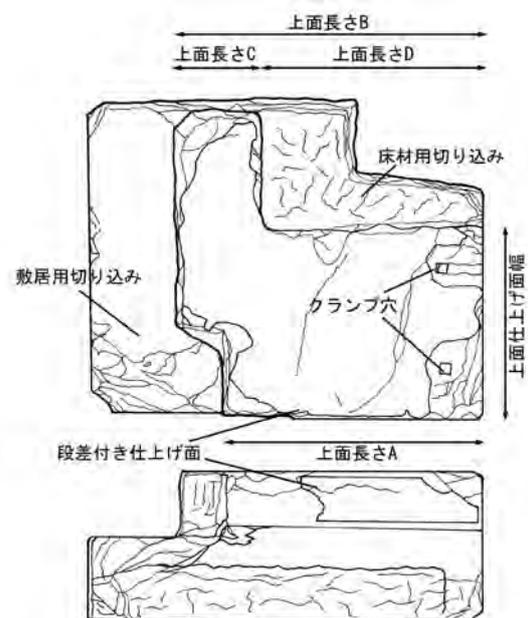


図 2-34 プロナオス仕切り壁用トイコベート部材詳細図

プロナオス仕切り壁用トイコベート部材寸法 (m)

部材名	上面仕上げ面幅	上面長さ A	上面長さ B	上面長さ C	上面長さ D	部材高さ	部材長さ	部材幅	外側装飾の出
Δ11	0.526	0.699	0.831	0.611	0.220	0.404	1.073	0.872	0.012
Δ17	0.515	0.706	0.862	0.632	0.230	0.402		0.870	
平均	0.521	0.703	0.847	0.622	0.225	0.403	1.073	0.871	0.012

図 2-35 プロナオス仕切り壁用トイコベート部材寸法表



図 2-36 ナオス入口の敷居部材

からナオス、プロナオスそれぞれの入口に扉が設けられたと考えられるが、扉そのものの部材は見つけることができなかった。

(1) ナオス入口の敷居部材

・ $\Delta 13 + \Delta 133 + \Delta 477 + \Delta X4, \Delta 119$

ナオス入口部分の敷居部材である。元々は1つの大きなブロックでつくられていたが、現存するのは端部を含んだ全体の約半分が4つに割れた状態で残っている部材 ($\Delta 13 + \Delta 133 + \Delta 477 + \Delta X4$) が1個、もう1つは片方の端部を含む全体の4分の1ほどの部材 ($\Delta 119$) である。中央部分の約4分の1が失われている。材質は石灰岩である。



図 2-37 プロナオス入口の敷居部材

敷居部材の高さは0.400mであった。正面立ち上がり部分に高さ0.114m、幅0.065mのモールディングをもっている。上面はかなり磨り減った状態である。扉が収まる内側部分は上面より0.065m低く、幅は0.300mであるが上面の磨耗のため正確な寸法ははっきりとしない。内側部分は荒い仕上げになっていて総高さに対して0.015mの傾斜がついている。扉の軸受けの穴は左右で少し大きさが違うが、左側が深さ0.033m、右側は深さ0.029mである。左の軸穴には固定するための鉛を流し込む溝がみられる。軸受けに対応する敷居の中心部には、門を固定する軸受けの矩形の穴が2個残っている。大きさは一方が0.075 × 0.065 m、もう一方が0.075 × 0.045 m、深さはともに0.065 mである。

敷居部材の左右の端部には、いくつかの複雑な痕跡が残っている。端部の縁に沿って残る3つの矩形のダボ穴は、入口の壁のオルソスタットの端部を敷居に固定するものと思われる。立枠の痕跡は、幅0.040 m、深さ0.022 mの細長い痕跡で、ここに立枠下部が落とし込みによっ

て設置された。痕跡の形状から考えて、入口の立枠は、プロナオス側、主室側、それに敷居の内側、それぞれに面する部分に少なくとも3枚に分けて構成されていたと思われる。またこれらの痕跡から、入口の有効の開口幅は約2.030m、扉1枚の幅は約1.015mであり、元の敷居部材の長さは2.955mであると推測できた。

(2) プロナオス入口の敷居部材

・ Δ 572

プロナオスの入口の敷居と考えられる部材である。石灰岩で作られている。欠損により1つの側面と底面がなく、部材本来の長さとは高さは不明である。現存の最大で高さは0.273m、長さは0.490mで、幅は0.390mであった。最上面の幅は0.213mで、前面側、背面側ともに0.054m低いところに水平面が設けられており、幅はそれぞれ0.038m、0.139mであった。また、最上面の部分は側面が背面側に比べて0.071m突出しており、角が切り込まれている。この形状はアンタ用のトイコベート部材の内側の切り込みと対応するため、この部材は、プロナオス入口の敷居の部材であると推測できる。最上面の側面端部付近には0.085m角、深さ0.037mのダボ穴がみられ、背面側の水平面にも側面端部付近に0.096×0.040m、深さ0.029mのダボ穴が見られた。前面には段差付きの仕上げ面が施されている。

・ Δ X6

プロナオスの入口の敷居と考えられる部材である。石灰岩で作られている。欠損により1つの側面と底面がなく、部材本来の長さとは高さは不明である。現存の最大で高さは0.245m、長さは0.396mで、幅は0.392mであった。最上面の幅は0.214mで、Δ 572と同様に前面側に0.054m低い幅0.036mの水平面が施され、背面側には0.055m低い幅0.142mの水平面がとられている。最上面の側面側は背面側よりも0.042m突出しており、前面側の角が切り込まれている。このことからプロナオス入り口の敷居の部材であると推測できる。最上面の側面端部付近には0.085×0.109m、深さ0.036mのダボ穴が見られた。また、背面側の水平面の側面端部付近にも0.094×0.033m、深さ0.033mのダボ穴が見られる。前面には段差付きの仕上げ面が施されている。

・ Δ X7

細かな形状はことなるが、プロナオスの敷居部材に形状が類似する点が多くみられるため敷居に使われた部材だと考えられる。2つの側面の一部と上面の一部のみが残っている。上面より0.071m低いところに幅0.110mの水平面が設けられており、荒い仕上げが施されている。また、上面の端から0.36m、0.11mのところから0.060×0.028m、深さ0.032mのダボ穴らしき穴が見られる。部材の元の大きさは欠損のため不明であるが、現状の最大値は0.045×0.034mであった。高さも同様で、現状の最大で0.180mであった。

f. オルソスタット部材

オルソスタットとは壁の腰壁部分を形成する部材であり、トイコベートの上に設置される。メッセネ神殿においては石灰岩で作られていた。オルソスタット部材は出土した部材の中で最も大きい部材であり、状態のよい9個に関して、実測と図面作製を行なった。形状からオルソスタット部材を以下の6種類と、特定不明の部材に分類した。

(1) アンタ用

一端がアンタの角柱となっており、もう一端が壁に続く接合面となっていることから明らかにアンタ用と判断できるオルソスタット部材は4個すべてが出土しており、実測と図面作製を行った。高さは0.962～0.965mであり、長さは1.384～1.390mであった。幅は角柱部で0.572～0.573m、それに続く壁の幅は0.488～0.493mであった。共通の加工として外側と内側側面両方の下部に深目地が施されている。上面には角柱中央部分に正方形のダボ穴が1つ見られる。また、底面には角柱部分中央と壁側付近に1つずつの正方形のダボ穴が見られた。このダボ穴はその形状からアンタ用、プロナオス及びオピストドモス用のトイコベート部材の上面に見られた正方形のダボ穴と対応していることがわかった。

・ Δ 4+ Δ 568+ Δ 574+ Δ X4

アンタ角柱先端部分が欠損のため全体の長さは不明であるが、現存の長さは1.410mで、高さは0.964mであった。壁部分の幅は上面で0.483m、下面で0.493m、角柱部分の幅は上面で0.563m、下面で0.573mであった。外側の面が傾斜しているため上面は0.010m小さくなっている。外側、内側両方の下部に深目字が見られる。上面には角柱部分中央に矩形のダボが1つ、部材中央付近にてこ穴とダボ穴が1つずつ、接合面側端部にクランプ穴が2つ残っている。また、角柱部分の内側にもダボ穴らしきものが見られる。底面には角柱部分中央に大きさ0.095



図 2-38 アンタ用オルソスタット部材

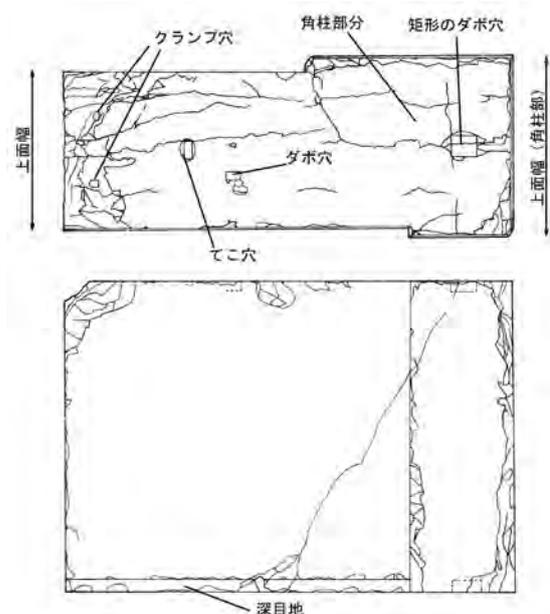


図 2-39 オルソスタット部材詳細図

× 0.080m、深さ 0.035m のダボ穴が見られ、接合面側に 0.081m 矩形、深さ 0.038m のダボ穴が見られた。

・ Δ 6

ほぼ完全な形で残っている部材である。部材の高さは 0.959m であり、長さは底面で 1.384m、上面で 1.376m であった。壁側の幅は底面で 0.488m、上面で 0.485m である。アンタの幅は以下の通りである。

角柱正面幅 底面 0.562m 上面 0.552m

角柱外側幅 底面 0.316m 上面 0.308m

角柱内部幅 底面 0.637m 上面 0.629m

外側面下部に深目字が見られるが、内側下部は破損のため目地の有無は不明であった。上面には角柱部分の中央に大きさ 0.085 × 0.067m、深さ 0.037m のダボ穴、部材中心付近にてこ穴とダボ穴が 1 つずつ、接合面側端部にクランプ穴が 2 つ残っている。また、角柱内側部分にもダボ穴らしきものが見られる。底面には角柱部分の中心と接合面側に矩形のダボ穴が見られた。

・ Δ 22

内側下部が大きく破損している部材である。部材の高さは 0.962m、長さは底面で 1.390m、上面で 1.383m である。壁の部分の幅は欠損のため底面は不明であり、上面では 0.483m であった。角柱部分の幅は以下の通りである。

角柱正面幅 底面 0.572m 上面 0.558m

角柱外側幅 底面 0.323m 上面 0.316m

角柱内側幅 底面 0.625m 上面 0.615m

外側の面の下部に深目字が見られるが、内側面は欠損のため目地の有無は不明である。上面には角柱中央部分に大きさ 0.066 × 0.081m、深さ 0.035m のダボ穴が見られ、部材中央付近にてこ穴とダボ穴が 1 つずつ、接合面側端部に 2 つのクランプ穴が見られた。底面には角柱部分に大きさ 0.090 × 0.093m、深さ 0.035m のダボ穴が見られる。

・ Δ 40+ Δ 45

角柱部分を含む Δ 40 と後部の Δ 45 の二つに割れており、さらに内側が剥離し欠損している。部材の高さは 0.965m、長さは底面で 1.390m、上面で 1.377m であった。欠損のため壁部分の幅は不明である。

角柱正面幅 底面 0.577m、上面 0.557m

角柱外側幅 底面 0.325m、上面 0.312m

角柱内側幅 欠損のため不明

角柱の正面幅は内側外側ともに 0.010m の傾斜がある。角柱の前面部分も高さに対して後ろに向かって 0.013m の傾斜が見られる。つまり、アンタの前面、内側、外側突出部ですべて壁の中心部に向けて約 0.010m の傾斜が認められる。上面には角柱部分中央に矩形のダボ穴が 1 つとそれにつながる形で鉛を流す溝が見られ、部材中央付近にてこ穴が 1 つ、接合面側にクランプ穴が 1 つ見られた。底面は実測できなかった。



図 2-40 交差部用オルソスタット部材



図 2-41 プロナオス・オピストドモス側面壁用オルソスタット部材

(2) 交差部用

部材の内側面にアナシロシスが施されており、交差部の部材として用いられたと思われる部材は、2個見つかり、実測と図面作製を行った。外側下部には深目地が見られる。また、アナシロシスの加工を境に、一方の下部には深目地が施されており、もう一方の下部には深目地は見られない。これまでの部材分析から、深目地が施されている側が、プロナオスもしくはオピストドモスに配置されるということがわかる。

・ Δ 19

部材の長さは 1.920m で、幅は上面で 0.483m、底面で 0.484m、高さは 0.962m であった。内側面には端部から約 0.55m のところにアナシロシスが施されており、接合面となっている。また、端部から 0.464m の位置から下部に深目字が彫られている。外側面には下部と外側から見て左の端部に縦目地が見られた。上面には、てこ穴とダボ穴が 1つずつの組が 2つと一方の側壁の接合面側と内側に伸びる接合面側端部にそれぞれ 2つずつ、また、もう一方の側壁の接合面側端部には、1つのクランプ穴が見られた。

・ Δ 144

部材の長さは 1.904m、幅は 0.477m、高さは 0.955m であった。内側にあたる面には端部から 0.131m の位置にアナシロシスが施されておりその下部には 1つのダボ穴が見られる。内側面には下部とアナシロシスから遠い方の端部に深目字が施されており、外側面にも、現存する方の側面端部と下部に深目字が施されている。上面にはてこ穴とダボ穴が 1つずつの組が 2組みられ、側壁の接合面側端部に 2つのクランプ穴と内側に伸びる接合面側にクランプ穴が 1つ残っている。

(3) プロナオス及びオピストドモス側面壁用

アンタ用オルソスタット部材と同様に、外側、内側両方の下部に深目地が彫られていることからプロナオスもしくはオピストドモスの側面壁に用いられたと考えられる部材である。1個出土しており、実測と図面作製を行った。

・ Δ 27

部材の一部から先が欠損していたが、欠損部分が見つかり、ほぼ完全な形に復元された部材である。復元された部材の長さは1.924mあった。また、幅は0.477m、高さは0.966mである。外側面、内側面ともに側面と下部に深目字が施されている。上面には一方の接合面側付近には1つのでこ穴、もう一方の接合面側端部にはてこ穴が1つと壁部材をつなぐためのダボ穴が1つ見られた。さらに両方の接合面側端部にそれぞれ2つのクランプ穴が施されている。

(4) プロナオス仕切り壁用

側面接合面下部に敷居部材と対応する切り込みがあることから、敷居部材に隣接し、プロナオス仕切り壁用に用いられた部材である。1個出土しており、実測と図面作製を行った。

・ Δ 20

側面仕上げ面の片側と片方の接合面が欠損しており、元の長さや幅は不明である。高さは0.965mであった。部材の現存の長さ、幅はそれぞれ1.240m、0.402mである。仕上げ面側の一方の端部及び下部には0.037mの深目字があり、こちらが外側にあたると考えられる。また仕上げ面下部には接合面から1.110mの位置に高さ0.206mの切り込みが施されている。上面には接合面側端部に2つのクランプ穴、中央にてこ穴とダボ穴が1つずつ残っている。

(5) オピストドモス仕切り壁用

他のオルソスタット部材よりも長さが短く、その長さがオピストドモス仕切り壁用トイコベート部材の約2倍の長さとなっていること、一方の側面下部にのみ深目地が彫られていること、また、プロナオス仕切り壁用としては長すぎることから、オピストドモス仕切り壁用の部材であると判断できる部材が、1個出土しており、実測と図面作製を行った。

・ Δ 7

部材の長さは1.708m、幅は上面で0.480m、下面で0.487mである。高さは0.953mであった。外側の仕上げ側面側にのみ下部に深目字が見られる。また、外側面が傾斜しているため底面幅よりも上面幅が0.007m小さくなっている。上面にはてこ穴とダボ穴が1つずつの組が2組と接合面側にそれぞれ2つずつのクランプ穴がある。底面には中央と内側面側にてこ穴が1つ見られる。



図 2-42 プロナオス仕切り壁用オルソスタット部材

図 2-43 オピストドモス仕切り壁用オルソスタット部材

アンタ用オルソスタット部材寸法 (m)

部材名	下面幅	下面幅 (角柱部)	上面幅	上面幅 (角柱部)	部材長さ	部材高さ
Δ4+Δ568+ΔX	0.493	0.573	0.483	0.563		0.964
Δ6	0.488		0.485	0.552	1.384	0.959
Δ22	0.490	0.572	0.483	0.558	1.390	0.962
Δ40+Δ45				0.557	1.390	0.965
平均	0.490	0.573	0.484	0.558	1.388	0.963

交差部用オルソスタット部材寸法 (m)

部材名	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
Δ19	0.484	0.483	1.920	0.962
Δ144	0.477	0.477	1.904	0.955
平均	0.481	0.480	1.912	0.959

プロナオス側面壁用オルソスタット部材寸法 (m)

部材名	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
Δ27	0.485	0.477	1.924	0.966

プロナオス仕切り壁用オルソスタット部材 (m)

部材名	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
Δ20				0.965

オピストドモス仕切り壁用オルソスタット部材寸法 (m)

部材名	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
Δ7	0.487	0.480	1.708	0.953

特定不明オルソスタット部材寸法 (m)

部材名	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
Δ98+98a	0.490	0.484		0.969

	下面幅	上面幅	部材長さ	部材高さ
全平均	0.487	0.482	※	0.962

※ アンタ用	1.388
側面壁用	1.916
オピストドモス仕切り壁用	1.708

単位(m)

図 2-44 オルソスタット部材寸法表

(6) ナオス側面壁用

ナオス側面壁用のオルソスタット部材は今回の調査においては出土していない。しかしながら、他のオルソスタット部材の形状から高さは約 0.96m だと推測でき、長さはナオス側面壁用トイコベート部材の長さの 2 倍である約 1.92m で、幅は約 0.48m であると考えられる。また、交差部の部材の形状から、外側面のみ深目地が彫られており、内側には彫られていなかったことが推測できる。²¹⁾

(7) 特定不明の部材

・ Δ 98+98a

幅は上面で 0.484m、下面で 0.480m であった。高さは 0.969m である。部材の元の長さは欠損のため不明であるが、現存の長さは 1.529m であった。片側側面下部のみに高さ 0.039m の深目地が彫られており、この側面が神殿の外側に面すると思われる。外側側面は、上面に対して下面が 0.006m 突き出ており、内側側面は下面に対して上面が 0.005m 突き出した形状をしている。上面には現存する壁とつながる接合面側の端部に 2 つのクランプ穴がみられ、端部から約 0.05m のところにてこ穴とダボ穴が一つずつ見られる。また、底面には内側中央端部にてこあてが見られた。形状から、ナオスの側面壁用、もしくはオピストドモス仕切り壁用の部材であることが考えられるが、元の部材の長さが不明であるため判断できない。

g. 壁ブロック部材

オルソスタットの上に配置され、レンガ積みのように配置される壁ブロック材である。壁の石材はほとんど出土していない。2 個の部材に関して、実測と図面作製を行ったが、どちらの部材も欠損がひどく、元の部材の長さは不明である。幅は約 0.47m で高さは 0.33m であった。材質はポロスである。出土数が少ないのは、壁石が手ごろな大きさであるため、後の時代に民家などの建設資材として使用されたためと思われる。



図 2-45 壁ブロック部材



図 2-46 円柱ドラム

• Δ 68

部材の幅は0.473mで高さは0.332mであった。欠損がひどく元の部材の長さは不明であるが、長さは現存の最大で0.545mである。上面には中央にてこ穴とダボ穴が1つずつ、垂直接合面側端部には1つのクランプ穴が見られる。底面には現存する側の端部にてこあてが施されていた。

• Δ 105+ Δ 105 α

部材の幅は0.471mで、高さは0.331mであった。欠損がひどく元の部材の長さは不明であるが、長さは現存の最大で0.756mである。上面には側面接合面側の端部に1つのクランプ穴、中央にてこ穴とダボ穴が1つずつ見られた。

h. 円柱ドラム

円柱ドラム部材は24個出土しているが、材料が柔らかいポロスであるため、風化による破損状況がひどい。表面には漆喰が塗られていた痕跡も見つかっている。(PLATE34-3)²²⁾ 状態の良かった1個に関して図面作製を行い、他の部材に関しては寸法のみを計測した。現存する中で最大の直径は0.747mで最小直径は0.651m、高さは0.650～0.906mとばらつきがあった。後述する柱頭の下部直径が0.648～0.655mであることから、下部直径がこの値以下であるΔ122、Δ124、Δ193は内陣部の柱であることがわかった。フルートの数は20本であった。また、部材の中には側面に長方形のダボ穴のようなもの

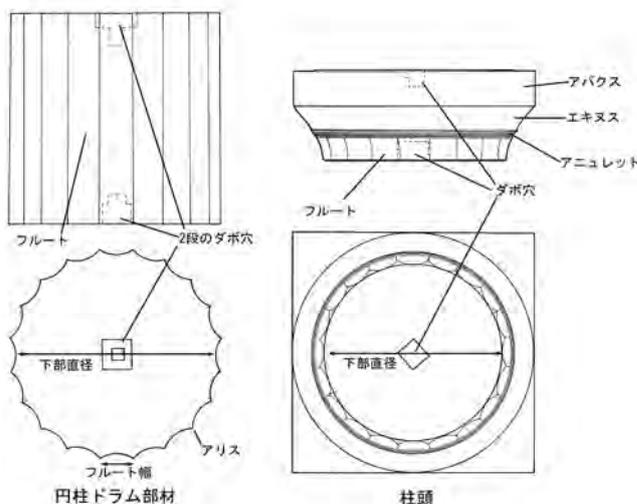


図2-47 円柱ドラム、柱頭詳細図

円柱ドラム部材寸法 (m)

部材番号	高さ	下部直径	上部直径	フルート幅
外部柱				
Δ61	-	0.747	-	0.121
Δ62	0.779	-	0.743	0.125
Δ63	0.760	-	0.749	0.125
Δ84	0.748	-	0.654	0.110
Δ87	0.774	0.704	0.680	0.110
Δ88	0.704	-	-	0.110
Δ102	-	-	0.654	0.105
Δ111	0.809	-	0.651	0.109
Δ121	0.840	-	-	0.110
Δ126	0.811	-	-	0.116
Δ127	0.781	0.734	0.714	0.122
Δ128	0.736	-	-	0.113
Δ148	0.746	-	-	0.110
Δ149	0.650	0.722	-	0.120
Δ150	0.745	-	0.657	0.110
Δ165	-	-	-	0.123
Δ167	-	0.703	-	0.115
Δ168	-	-	0.658	0.110
Δ190	0.731	-	-	0.110
Δ191	-	-	0.664	0.117
Δ202	0.758	-	-	0.090
内部柱				
Δ122	0.700	0.681	-	0.117
Δ124	0.768	0.681	-	0.114
Δ193	0.760	0.602	-	0.101

図2-48 円柱ドラム部材寸法表

が見られる部材があり、これは柵などを設置するために使われたのものであると考えられた。(PLATE34-2)

・ Δ 127

部材の高さは0.780mである。上面の直径はアリス間で0.754m、フルート間で0.712mであった。底面の直径はアリス間で0.776m、フルート間で0.734mである。上面中央には一辺約0.100m、深さ0.072mのダボ穴がみられ、さらにその中心に45度傾く形で一辺0.045m、深さ0.052mのダボ穴が残っている。底面にも上面同様のダボ穴が、45度傾く形で残っていた。

i. 柱頭

ドリス式の柱頭が2個出土しており、実測と図面作製を行った。どちらの部材も風化が激しくフルーティングやアニュレットなどの装飾は一部しか残っていない。部材の大きさからどちらの部材も外部円柱に使われてたものだと考えられ、²³⁾ 内部円柱の柱頭は出土していない。材質はポロスであった。

・ Δ 32

全体像はわかるものの風化が激しく、フルーティングやアニュレットなどはほとんど消滅している。アバクス上面は0.882 × 0.882mであり、全体の高さは0.332mであった。アバクス、エキヌス、アニュレットの高さはそれぞれ、0.128m、0.088m、0.030mである。フルーティングの数は20本であった。円柱の上部直径はアリス間で0.689m、フルート底部間で0.655mである。下面のダボ穴は0.080 × 0.085m、深さ0.072mであった。上面にはアーキトレヴを載せる正八角形のベッティングが高さ0.004mでつけられている。上面中央には1辺0.053m、深さ0.063mのダボ穴、またその両側にも1つずつ長方形のダボ穴がみられる。

・ Δ X1

風化が激しく詳細部はほとんどつぶれている。アバクス上面が0.885 × 0.885m、全体高さは0.342mであった。アバクス、エキヌス、アニュレットの高さはそれぞれ0.136m、0.084m、0.031mである。フルーティングの数は20本。円柱の上部直径はアリス間で0.676m、フルート間で0.648mである。下面の中心には0.085 × 0.075m 深さが0.059mのダボ穴が見られ、さらにその中に0.052 × 0.041m、表面からの深さ0.106mの矩形の穴があるという2段のダボ穴となっている。アバクス上面にはアーキトレヴを載せる正八角形のペンティングが高さ0.004mでつけられており、中央には0.065 × 0.062m 深さ0.043mのダボ穴、またその中に0.050 × 0.046m、表面からの深さ0.061mの2段のダボ穴がある。さらにその両側にそれぞれ1つずつ長方形のダボ穴が見られた。

j. アーキトレーヴ部材

アーキトレーヴは、柱の上に位置し、梁となる部材である。3個の部材に関して実測と図面作製を行った。欠損がひどく、完全な形で残っているものはなかった。高さは0.511m～0.514mで、幅は0.385～0.389mであった。また、破損している中で最も大きな部材の長さは1.783mであった。レグラとグッタエが見られる外側の部材とそれらが見られない内側部材となるバックカー部材が出土しているため、2つの部材が表裏で合わさって配置されていたことがわかった。材質はポロスであった。

・ Δ 85 + Δ 86

破損のため本来の長さは不明である。高さは0.514m、現存の長さは1.783m、上面幅は0.421m、下面幅は0.385mであった。タエニアは高さが0.066m、幅が0.036mである。正面部分には部分的にスタッコを塗った痕跡が観察される。レグラとグッタエは破損がひどく寸法ははっきりとしないが、グッタエの間隔は0.068であった。上面には、中央にダボ穴が1つと背面側端部に3つのクランプ穴が見られる。レグラは寸法から復元すると長さ0.375m、高さ0.030m、グッタエは直径0.030m、高さ0.017mであった。

・ Δ 166

本来の長さは破損により不明である。高さは0.511mで、現存の長さは1.060m、上面幅は0.425m、下面幅は0.389mであった。タエニアは高さ0.065m、幅は0.036mである。正面部分には部分的にスタッコを塗った痕跡が確認される。上面のダボ穴は一辺0.070mで、深さは0.038mである。レグラの高さは0.044m、幅は0.036mであり、グッタエは直径0.035m、芯々間隔は0.068m、高さは0.016mであった。

・ Δ 294

破損のため本来の長さ、幅は不明である。高さは0.514m、現存の長さ、幅はそれぞれ0.653m、0.375mであった。高さがアーキトレーヴと同じ値であるが、タエニアやグッタエがない単純な部材のため、裏込め部材と思われる。端部は片方のみ残っており、45度に切られているため、出隅につかわれたと思われる。上面45度の部分に1つのクランプ穴が見られる。



図2-49 アーキトレーヴ部材



図2-50 アーキトレーヴ部材 (バックカー)

k. フリーズ部材

アーキトレーヴの上に位置するフリーズ部材は、破損がひどく、完全な形で残っているものはなかった。7個の部材に関して実測を行い、そのうち4個に関して図面作製を行った。トリグリフとメトープが1つの部材となる形状をしている。材質はポロスであった。

・ Δ 107 (図面なし)

トリグリフの一部が残るフリーズ部材。全体の大きさは破損のため不明であるが、現状の最大で長さは0.942mで、奥行きは0.668m、高さは0.36mであった。背面の天井を載せる部分が一部現存している。メトープの背面部分が残っており、メトープの厚さを知ることができる。その値は0.565mであった。また、天井部材を載せる部分の高さは約0.19mであった。

・ Δ 159

トリグリフとメトープの一部が残る部材である。部材の正面にはトリグリフの一部が残り、トリグリフに対して右側の側面と背面の一部が欠損、左側の側面はアナシロシスが施された接合面となっている。そのため部材の元の長さや奥行きは不明であるが、現存の最大値でそれぞれ、0.630m、0.580mであった。上面が荒れているものの、上面と底面ともに残っており、高さは0.578mである。トリグリフの1ユニットは0.115～0.128mで、トリグリフの正面長さは0.369mであった。また、メトープ部分の奥行きは0.470mである。背面にはトリグリフに対して直角に伸びる幅0.235mの突出した部分が残っている。突出部分の元の長さは欠損のため不明だが現在はメトープから0.073m飛び出した形になっている。突出部がないところには、天井を載せる加工の一部が残っている。上面にはクランプ穴、てこ穴は見られない。

・ Δ 210 (図面なし)

隅のトリグリフ部材である。部材の前面及び、底面が大きく破損しているため、トリグリフと部材の高さは不明である。現存の長さは、0.900m、高さは0.536mであった。背面には天井を載せるための加工が施されている。また、一方の側面の背面側の角が45度に切り込まれており中央には1つのクランプ穴が見られる。上面には長方形のダボ穴とてこ穴があり、45度の切り込み付近には約0.08m角のダボ穴が施されている。



図 2-51 フリーズ部材



図 2-52 フリーズ部材 (トリグリフ)

・ Δ 279

正面方向と側面方向の2つの面をもつ出隅部のトリグリフの貴重な断片である。現状の高さ0.335mで、現状の幅は0.403m、トリグリフの1ユニットは0.129～0.131mであった。底面には0.066m矩形、深さ0.036mのダボ穴が見られた。

・ Δ 293

トリグリフ、メトープを含むフリーズ部材である。正面下部にトラクターによる傷が数多く見られ、破損が激しいが、上面、底面ともに残っている貴重な部材である。正面左端にトリグリフの一部が認められる。現状での全長は1.060m、幅0.776m、高さは0.589mである。フリーズ幅は0.565mで、トリグリフ幅は1ユニットが約0.130mなので、トリグリフ全体幅は約0.390mであり、正面上部クラウニングは高さ0.080mである。後面下部には、高さ0.193m 幅0.170mの天井部材をのせる部分がある。右端後部は斜め45°に大きく切り込まれ、隣接部材と45°に突き合わせた出隅の部材であったことを示している。出隅部のトリグリフは欠損して残っていないが、右端の突出部分幅が0.365mなので、その寸法から正面側面2つのトリグリフがここに突合せに付いていたと思われる。上面には、0.085×0.072m、深さ0.047mのダボ穴がある。

・ Δ 406

トリグリフとメトープ部分が残るフリーズ部材である。破損がひどいが上面、正面、片方の側面がそれぞれ一部であるが残っている。現存の高さ、長さ、幅はそれぞれ0.516m、0.711m、0.597mであった。正面のトリグリフは上部、下部が欠損しているが形状はしっかり残っている。トリグリフの長さは0.375mである。上面にダボ穴、てこ穴が1つずつみられる。

・ Δ 773

トリグリフの小断片である。フリーズ部材の端部に使用されたものである。現状の大きさは0.241×0.303mで、高さは0.391mであった。

1. コーニス部材

コーニスとはエンタブラチュアの最上部の突き出した水平帯のことを意味し、軒の役割を果たす部分である。出土数が少なく、破損も激しいため、完全な形で残っているものはなかったが、2個の部材に関して実測と図面作製を行った。

・ Δ 380

大きく欠損した断片であり、全体の寸法は分からない。屋根の傾斜がわかる唯一のコーニス部材であり、非常に貴重な部材である。下面から高さ 0.040m の立ち上がりがあり、そこから高さ 0.022m 突出量 0.0275 m のシーマレクタのモールディングがある。ミューチュールはほとんど失われているが、内法間隔 0.098m で配置されている。屋根の勾配は 1/4.48 であった。

・ Δ 717

コーニスのゲイソン部分のみの断片で、ミューチュールといくつかのグッタエが確認できる。ミューチュールの幅は水平距離で 0.201m、高さは 0.024m、内法間隔は 0.093m であり、欠損のため長さは不明である。グッタエは直径 0.039m、内法間隔は 0.031 m で、高さは不明であった。

m. シーマ部材

シーマとは、コーニスの最上部に設けられる突き出した雨樋状の部分のことである。1個の部材が出土しており、図面の作成を行った。

・ Δ 135

部材の長さは 0.653m で、高さは 0.124m であった。幅は欠損のため不明だが現状の最大幅は約 0.310m である。軒の外側の立上り部分は外側に大きく張り出すように湾曲し、先端は尖っている。内側は直線で斜めに傾斜している。外側から見て右端の内側は切込みが入れている。また、上面の外側部分の端部にはクランプ穴が見られた。



図 2-53 コーニス部材



図 2-54 シーマ部材

(第2章註)

- 1) Jones, S. H. W. & Ormerod, A. H.: Pausanias, "Description of Greece", Loeb Classical Library, Cambridge/Mass, 1977. 日本語訳では、パウサニアス著、飯尾都人訳、「ギリシア記」、龍溪書舎、1991
- 2) 前掲註1) Pausanias, "Description of Greece", IV, 27, 5-7, パウサニアス、「ギリシア記」p. 290
- 3) Themelis 2003, pp. 42-43
- 4) アスクレピオス神域に関しては、熊本大学ギリシア古代都市建築調査団が2001年から2004年にかけて調査を行った。代表的な研究報告は以下のとおりである。
R. Yoshitake, Y. Hayashida and J. Ito, "A Survey of the Stoa of the Asklepieion at Messene," Journal of Architecture, Planning (Transaction of AIJ), No. 576, 2004, pp. 207-214.; 吉武隆一、林田義伸、伊藤重剛：ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域におけるストアの研究，日本建築学会計画系論文集，第585号，2004年，pp. 207-212；吉武隆一：ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域のストアに関する研究，熊本大学，2005
- 5) 前掲註1) Pausanias, "Description of Greece", IV, 30, 10, パウサニアス、「ギリシア記」pp. 299
- 6) メッセネの劇場に関しては、熊本大学ギリシア古代都市建築調査団が2008年から2010年現在まで現地調査を続けている。調査は現在も進行中である。これまでに以下の論文を発表した。
谷皓司、伊藤重剛、吉武隆一、林田義伸、中之丸諭志、國武真由美、足立義幸：地中海古代都市の研究(123)：古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(1)，日本建築学会研究報告・九州支部・3，計画系(48)，773-776，2009；中之丸諭志、伊藤重剛、吉武隆一、林田義伸、谷皓司、國武真由美、足立義幸：地中海古代都市の研究(124)：古代都市メッセネにおける劇場調査報告 2008(2)，日本建築学会研究報告・九州支部・3，計画系(48)，777-780，2009
- 7) Themelis 2006, p. 43.
- 8) 前掲註1) Pausanias, "Description of Greece", IV, 30, 11, パウサニアス、「ギリシア記」pp. 298-300においてメッセネ神殿に関して述べられている。また、神殿の背面の画像に関しては、作者や王の名等も述べられていた。
- 9) 前掲註1) Pausanias, "Description of Greece", IV, 1, 1, パウサニアス、「ギリシア記」pp. 237
- 10) 前掲註8) にてパウサニアスはアゴラの記述を行った後、ラプリアの女神像、そのほかの神域について述べ、次にアスクレピオス神域について述べた。メッセネ神殿に関してはこのすぐあとに述べられているため、メッセネ神殿はアスクレピオス神域の中にあるアスクレピオス神殿のことを指しているかのようにも思われる。
- 11) Themelis 2006, p. 43. において、テメリス氏は、
神殿から神に捧げた、つまり大理石や黄金で作られた彫像の破片が発見されたと述べている。その彫刻は女性の顔の下部の一部で紀元前4世紀後半の様式をしていると述べている。
- 12) Themelis 2005, pp. 48-49. において、テメリス氏は、様々な発掘要素と照らし合わせ、メッセネ神殿がアゴラの南西、つまりアスクレピオス神域の北西に位置することが明らかになったと述べている。また、このことからパウサニアスはアスクレピオス神域の記述を終えた後、アゴラに引き返し、メッセネ神殿の記述を行ったのだとも述べていた。
- 13) 前掲註11) p. 44. においてテメリス氏はアゴラと神域の建設は都市を上げた一大事業であり、その目的はペロポネソス半島の特異な民族的伝統としてのメッセネを突出させるためであったと述べている。

- 14) 前掲註1) Pausanias, “Description of Greece”, IV, 30, 6, パウサニ阿斯、「ギリシア記」 pp. 298
- 15) トータルステーションによる測量を行った。その結果、メッセネ神殿は北ストアに対して反時計回りに4.5度傾けて配置されていることがわかった。
- 16) メッセネ考古学協会によると発掘当時には、現在では欠損している部分が残っていたようであり、K. ΤΣΩΝΗΣ、Θ. ΧΑΤΛΗΘΕΟΔΩΡΟΥによるアゴラの平面図においては最下段の長さは、14.319 mとなっていた。3章における復元に関してはこちらの数値を使って行う。
- 17) Hodge 1966, Plate V, XI. 例えば、メッセネ神殿とほぼ同時期のドリス式神殿で、同じペロポネソス半島内の都市ネメアのゼウス神殿の調査報告書において、メッセネ神殿と類似した基礎配置の記述が見られる。
- 18) 同様のダボ穴が隅のクレピス部材Δ 50にも見られた。このほかにも、メッセネ神殿では端や、隅の部材において正方形のダボは頻繁に使われていた。
- 19) 括弧内の値は現状の最大値である。アンタのトイコバート部材はどの部材も下部の先端が欠損しており、もとの部材の大きさは不明であった。
- 20) 外周部のスタイロバート部材の正面長さの平均値は0.960 mであった。プロナオス・オピストドモスソ億面壁用のトイコバート部材も同様の値を示すため、トイコバート部材はスタイロバート部材に対応させ作られたことがわかる。
- 21) オルソスタット部材の高さ、幅はどの種類の部材も同じであった。よって内陣の壁厚はどれも同じであった。また、オルソスタット部材は1個のトイコバート部材をまたぎ隣のトイコバート部材中央のダボ穴によって固定されるため、オルソスタット部材の長さは下部のトイコバート部材の長さの2倍になる。下部の深目地はオピストドモス仕切り壁用の部材の内側にも彫られていない。つまり、ナオス内部には下部の深目地は彫られていなかったことがわかる。
- 22) アーキトレヴ部材にも同様の漆喰の跡が見られ、ポロスで作られていた部材は表面に漆喰が塗られ仕上げられていたと考えられる。
- 23) アーキトレヴの幅から考えて、これらの柱頭は妥当な寸法をしているといえる。また、これらの柱頭の下部直径よりも小さい下部直径をもつ円柱ドラムが見つかっている。それゆえこれらの柱頭は外部柱として使われたと考えることができる。

(図版出典)

- 図 2-1 : ギリシア地図、Google Earth を元に筆者が作成
- 図 2-2 : メッセネ都市図、K. ΤΣΩΝΗΣ、Θ. ΧΑΤΛΗΘΕΟΔΩΡΟΥ 作成に筆者が加筆
- 図 2-3 : アルカディア門、筆者撮影
- 図 2-4 : アスクレピオス神域、筆者撮影
- 図 2-5 : スタディオン、筆者撮影
- 図 2-6 : 劇場、筆者撮影
- 図 2-7 : アゴラ詳細平面図、K. ΤΣΩΝΗΣ、Θ. ΧΑΤΛΗΘΕΟΔΩΡΟΥ 作成を元に筆者が作成
- 図 2-8 : アゴラ断面図、筆者作成
- 図 2-9 : 東側掘り込み、伊藤重剛撮影
- 図 2-10 : 碑文石板台座、伊藤重剛撮影
- 図 2-11 : 神殿発掘後平面図、熊本大学ギリシア古代建築調査団作成のメッセネ神殿平面図 2007
を元に筆者作成
- 図 2-12 : クレピス部材寸法表、筆者作成
- 図 2-13 : クレピス部材、伊藤重剛撮影を元に筆者が加工
- 図 2-14 : スタイロベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-15 : スタイロベート部材、伊藤重剛撮影を元に筆者が加工
- 図 2-16 : 床舗装部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-17 : 床舗装部材寸法表、筆者作成
- 図 2-18 : アンタ用トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-19 : アンタ用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-20 : アンタ用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-21 : 交差部用トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-22 : 交差部用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-23 : 交差部用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-24 : ナオス側面壁トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-25 : ナオス側面壁用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-26 : ナオス側面壁用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-27 : オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-28 : オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-29 : オピストドモス仕切り壁用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-30 : プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-31 : プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-32 : プロナオス・オピストドモス側面壁用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-33 : プロナオス仕切り壁用トイコベート部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-34 : プロナオス仕切り壁用トイコベート部材詳細図、筆者作成
- 図 2-35 : プロナオス仕切り壁用トイコベート部材寸法表、筆者作成
- 図 2-36 : ナオス入口の敷居部材、伊藤重剛撮影

- 図 2-37 : プロナオス入口の敷居部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-38 : アンタ用オルソスタット部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-39 : オルソスタット部材詳細図、筆者作成
- 図 2-40 : 交差部用オルソスタット部材、伊藤重剛撮影の写真を元に筆者作成
- 図 2-41 : プロナオス・オピストドモス側面壁用オルソスタット部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-42 : プロナオス仕切り壁用オルソスタット部材、筆者撮影
- 図 2-43 : オピストドモス仕切り壁用オルソスタット部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-44 : オルソスタット部材寸法表、筆者作成
- 図 2-45 : 壁ブロック部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-46 : 円柱ドラム、伊藤重剛撮影
- 図 2-47 : 円柱ドラム・柱頭詳細図、筆者作成
- 図 2-48 : 円柱ドラム部材寸法表、筆者作成
- 図 2-49 : アーキトレーヴ部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-50 : アーキトレーヴ部材 (バックカー)、伊藤重剛撮影
- 図 2-51 : フリーズ部材、伊藤重剛撮影
- 図 2-52 : フリーズ部材 (トリグリフ)、伊藤重剛撮影
- 図 2-53 : コーニス部材、伊藤重剛撮影の写真を元に筆者作成
- 図 2-54 : シーマ部材、伊藤重剛撮影